

コリント

第二

①

「依存からの 脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年
(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

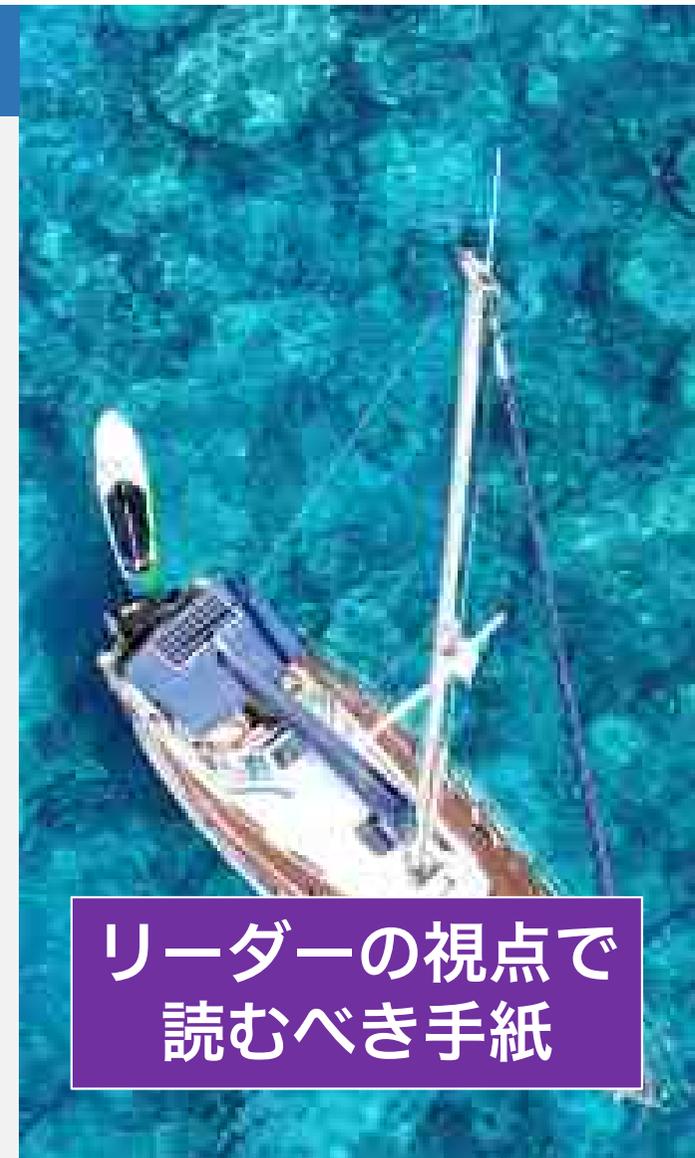
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶 II コリント1章1～2節

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



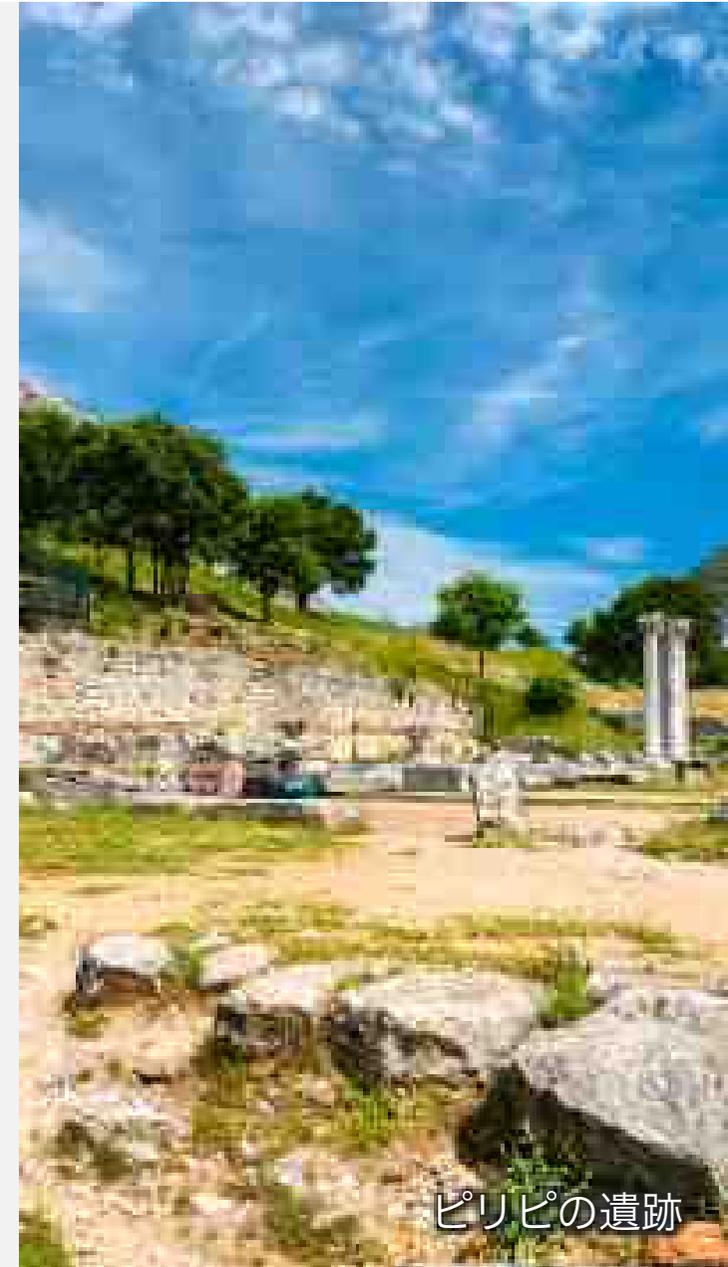
【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 II コリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

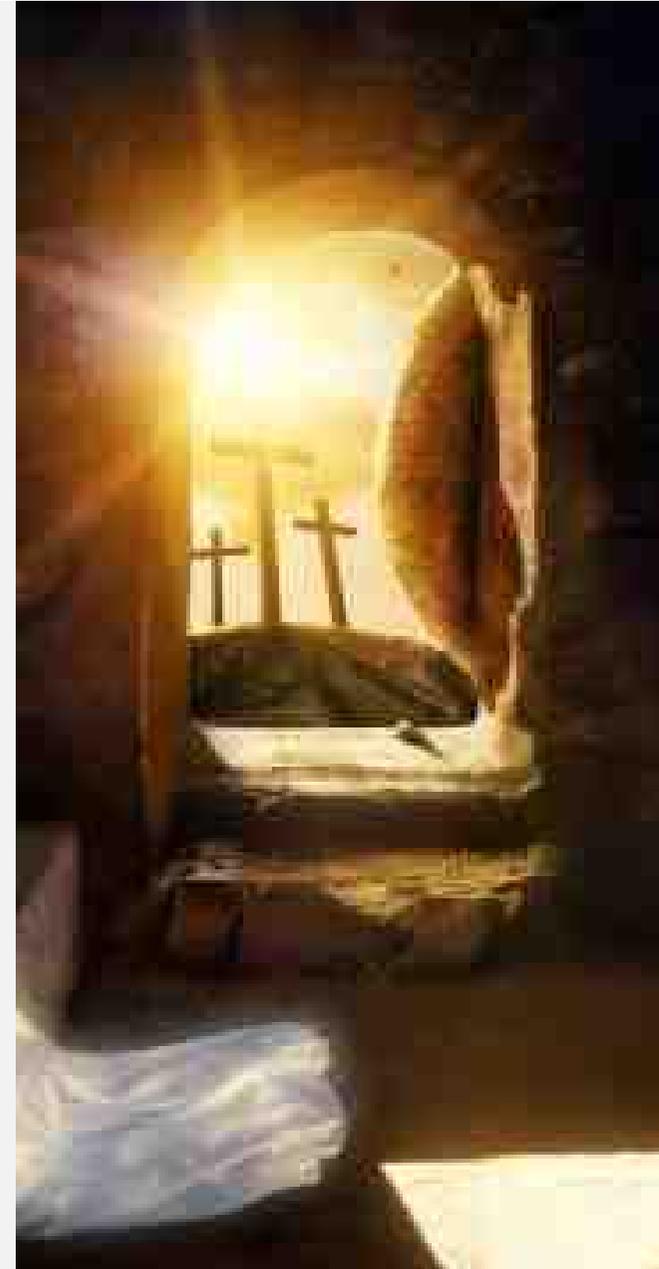


エペソの遺跡

【死の宣告】 II コリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

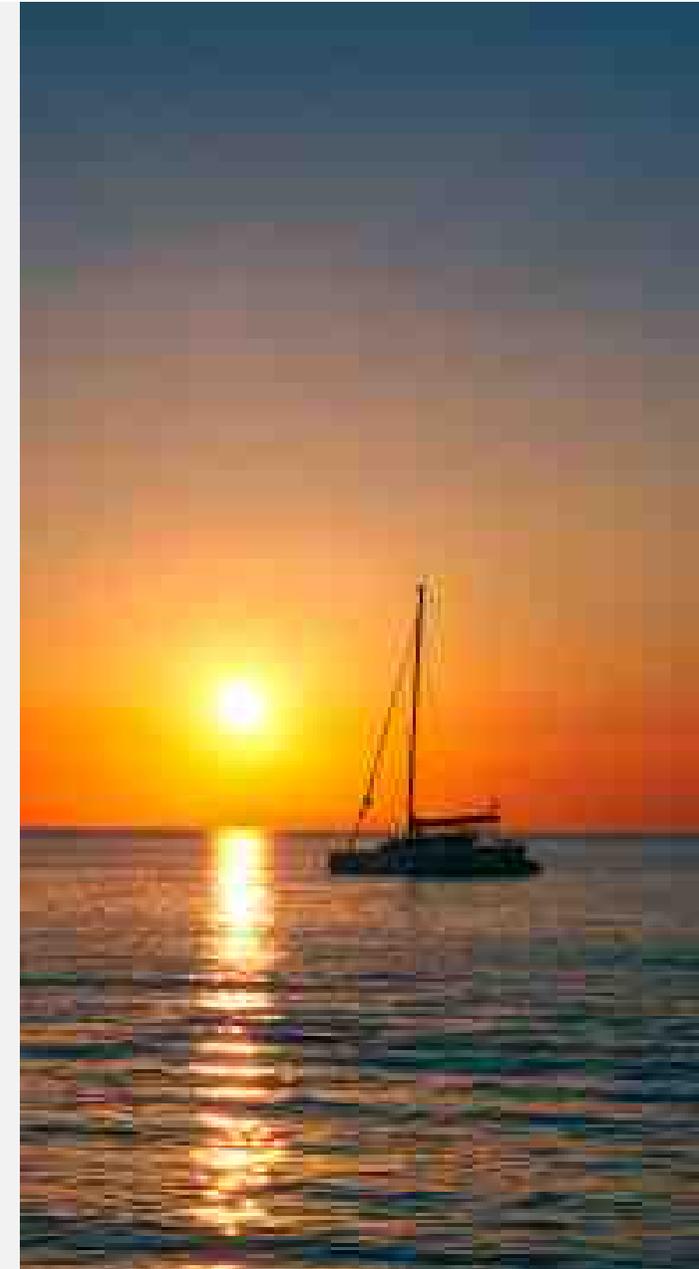
【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携拳、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

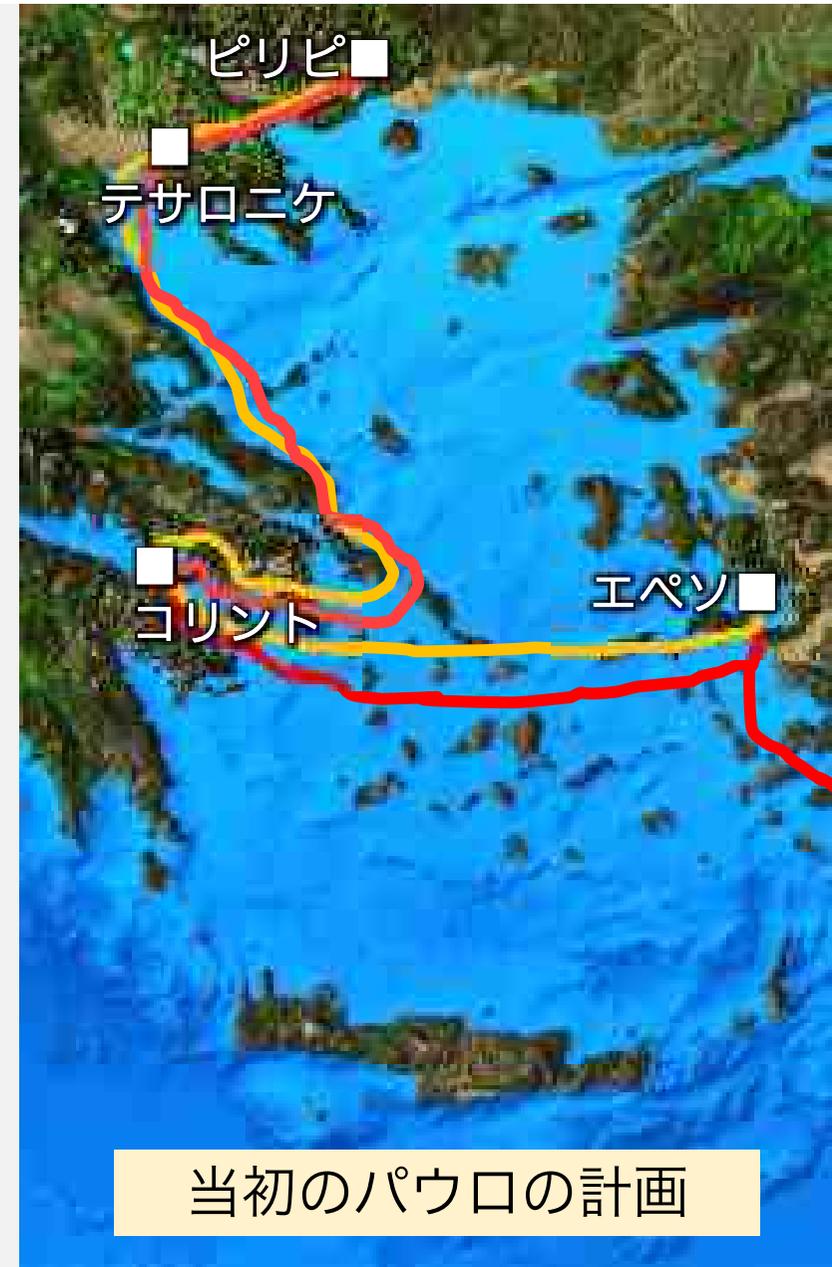
主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15～16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 Ⅱコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

← いまだ再臨されない
主イエスに重なる

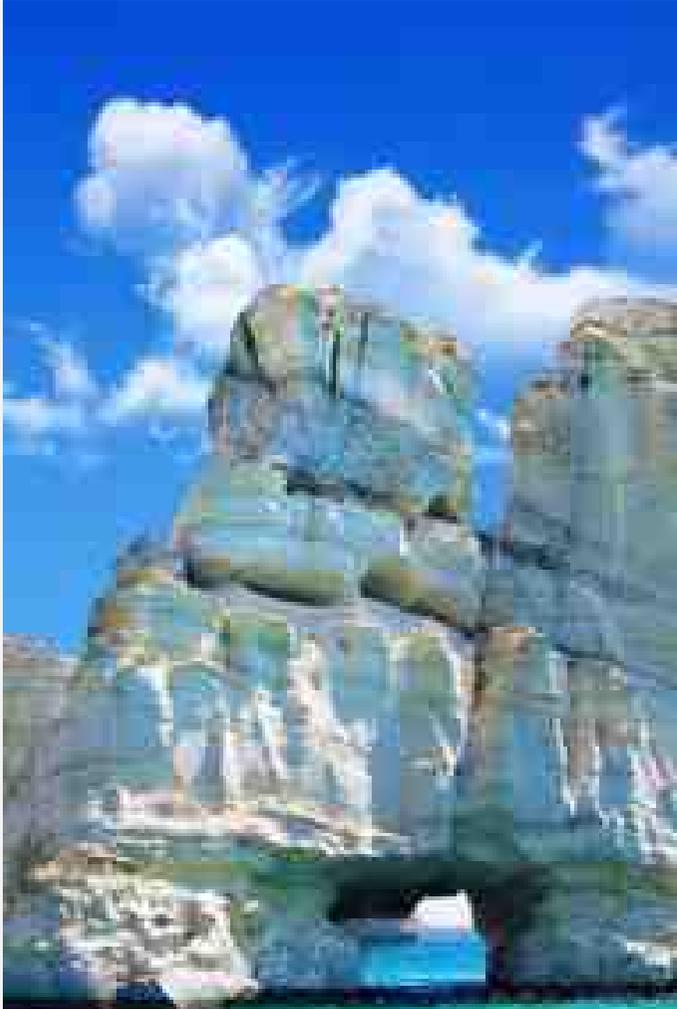


主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 II コリント 1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。



パウロが促すのは、
自発的な応答



IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくはは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさずはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➔遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活したこと、^{しん}を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの 脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年
(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

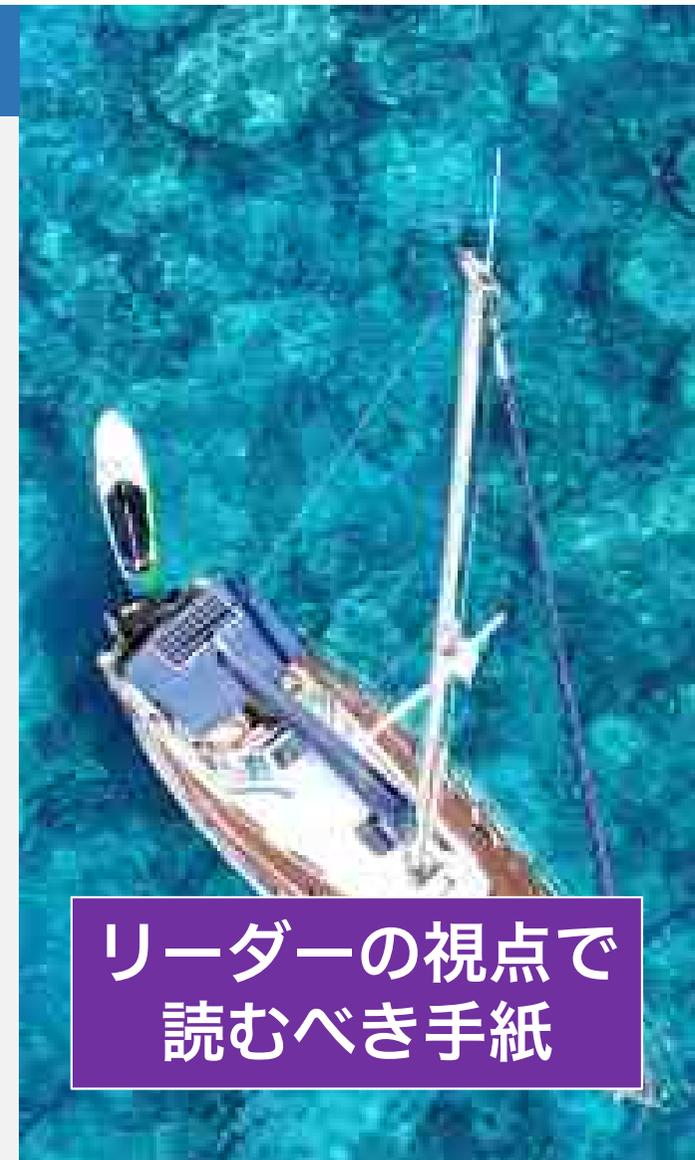
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶 IIコリント1章1～2節

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリピの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 Ⅱコリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

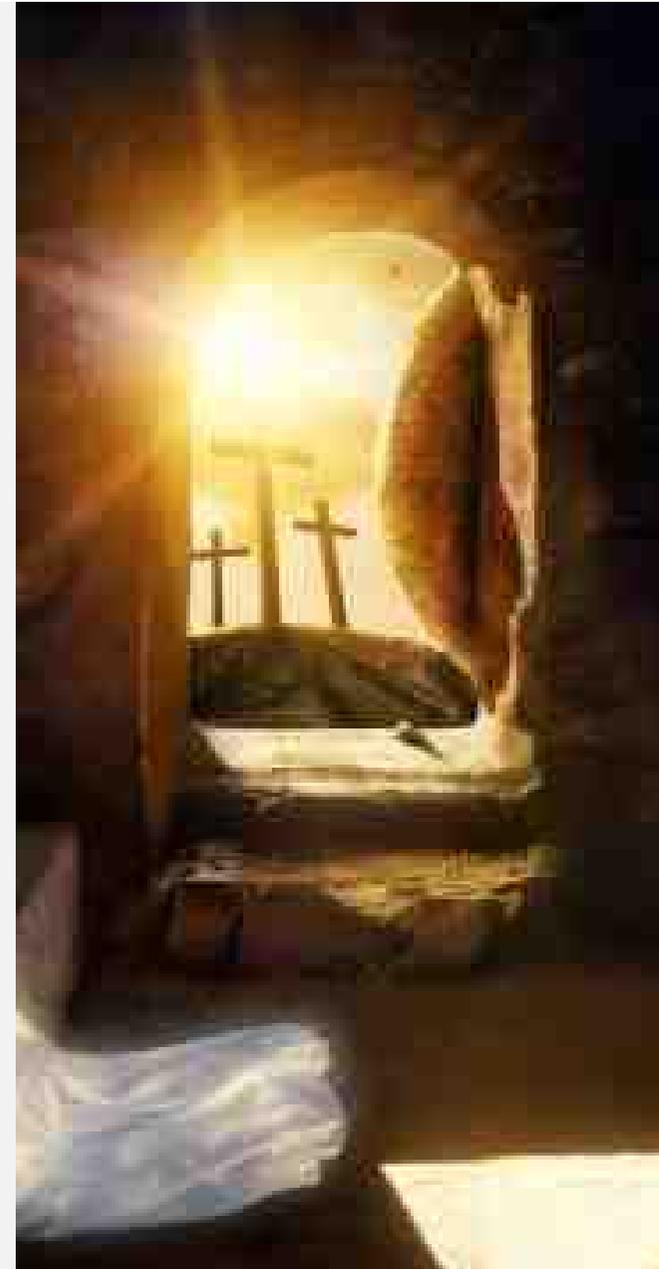


エペソの遺跡

【死の宣告】 Ⅱコリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント 1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

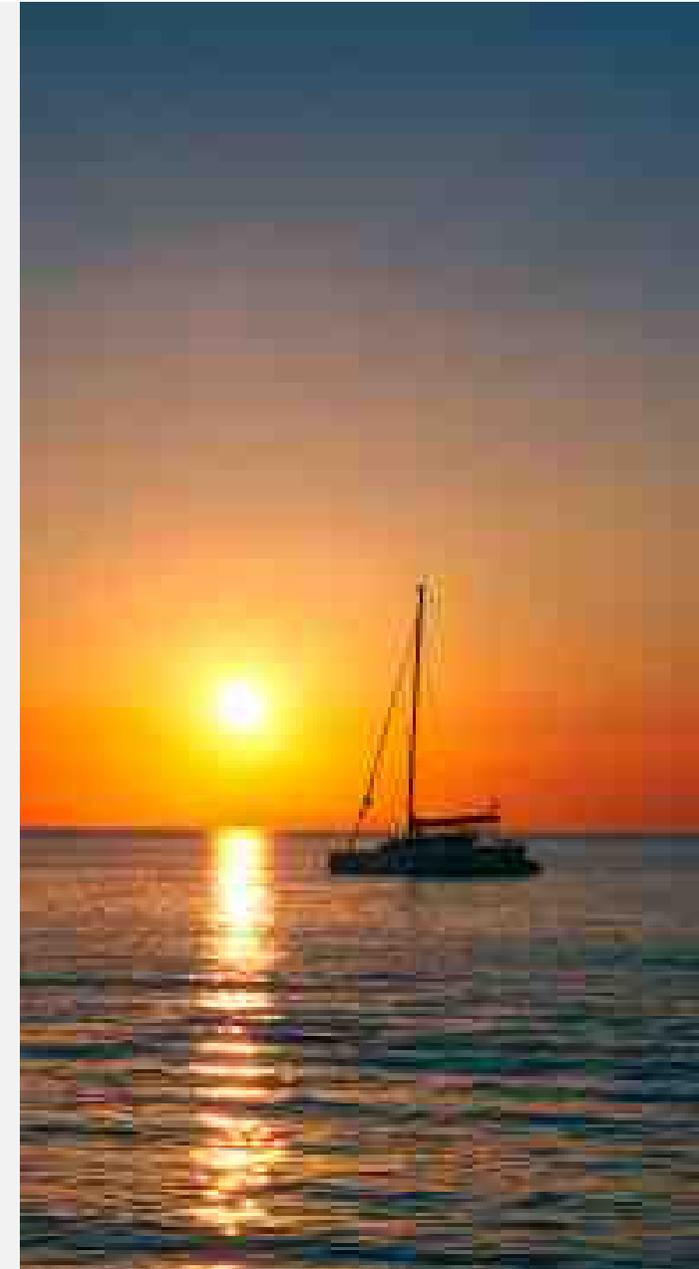
【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携挙、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15～16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 Ⅱコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

← いまだ再臨されない
主イエスに重なる

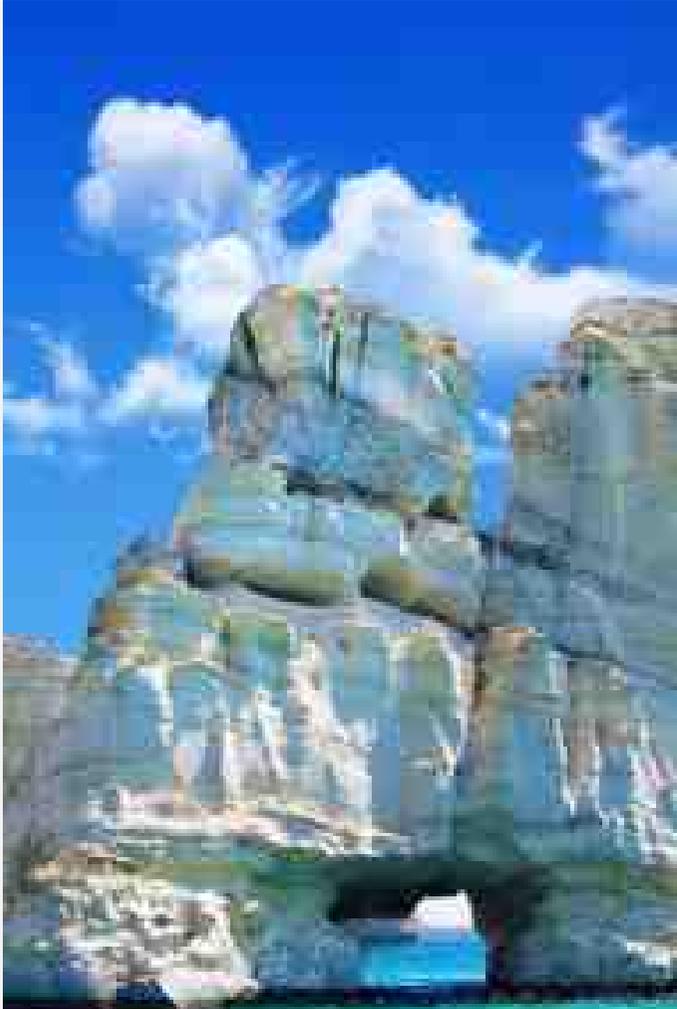


主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 IIコリント1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。



パウロが促すのは、
自発的な応答



IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくはは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➡遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活した^{しん}こと、を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの 脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年

(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

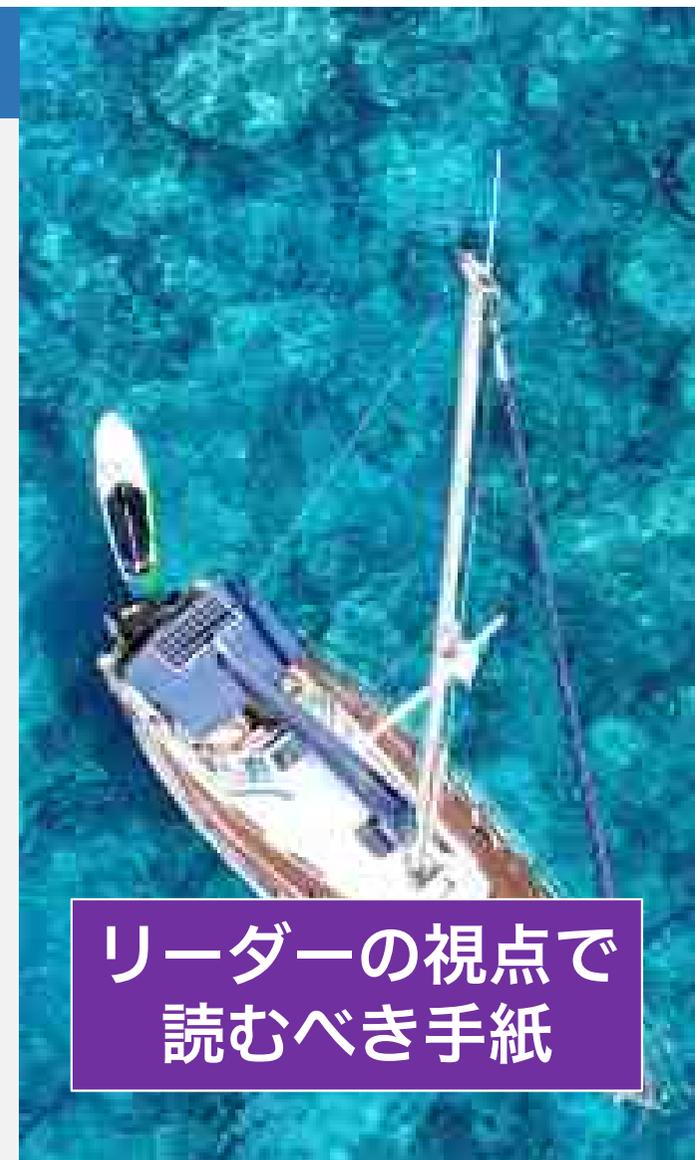
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶 IIコリント1章1～2節

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



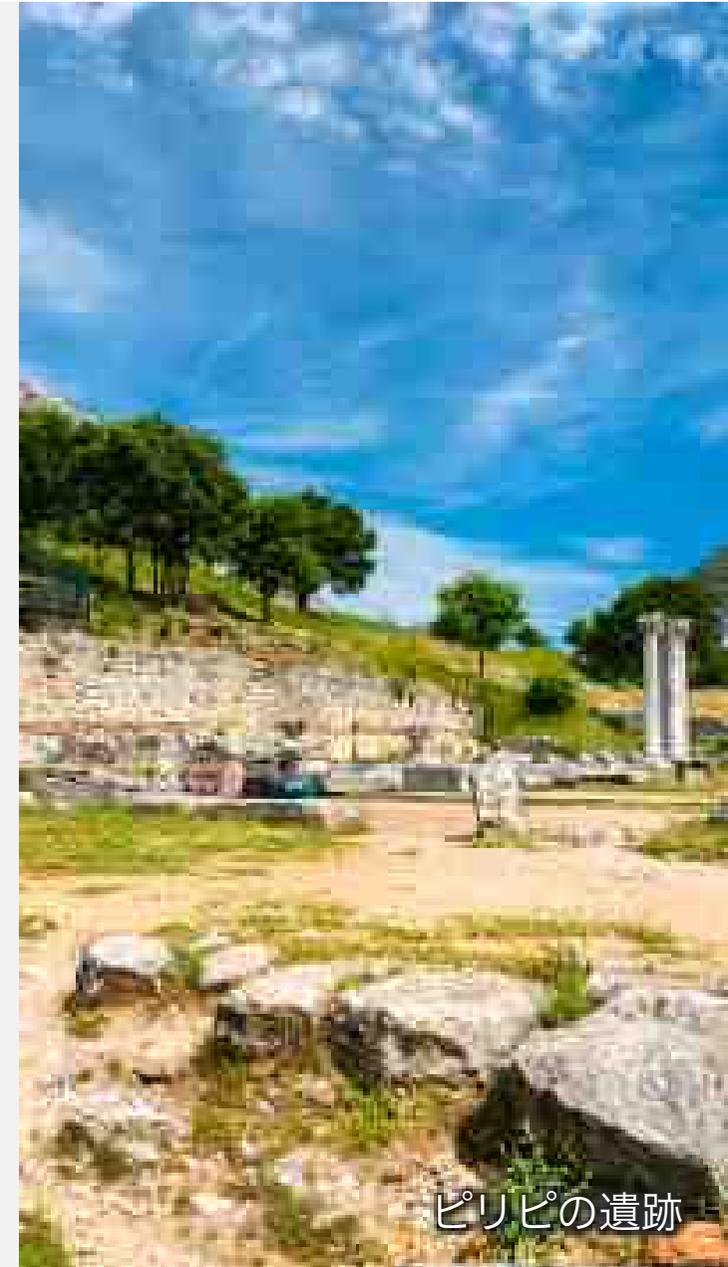
【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 II コリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

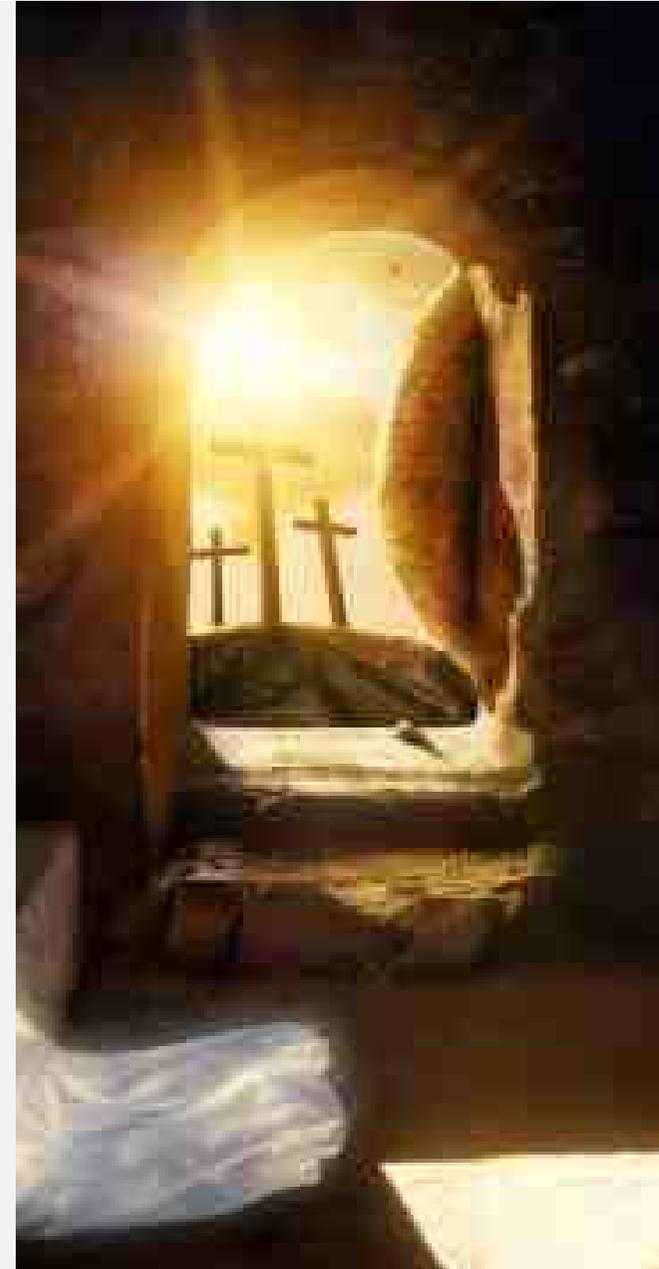


エペソの遺跡

【死の宣告】 Ⅱコリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

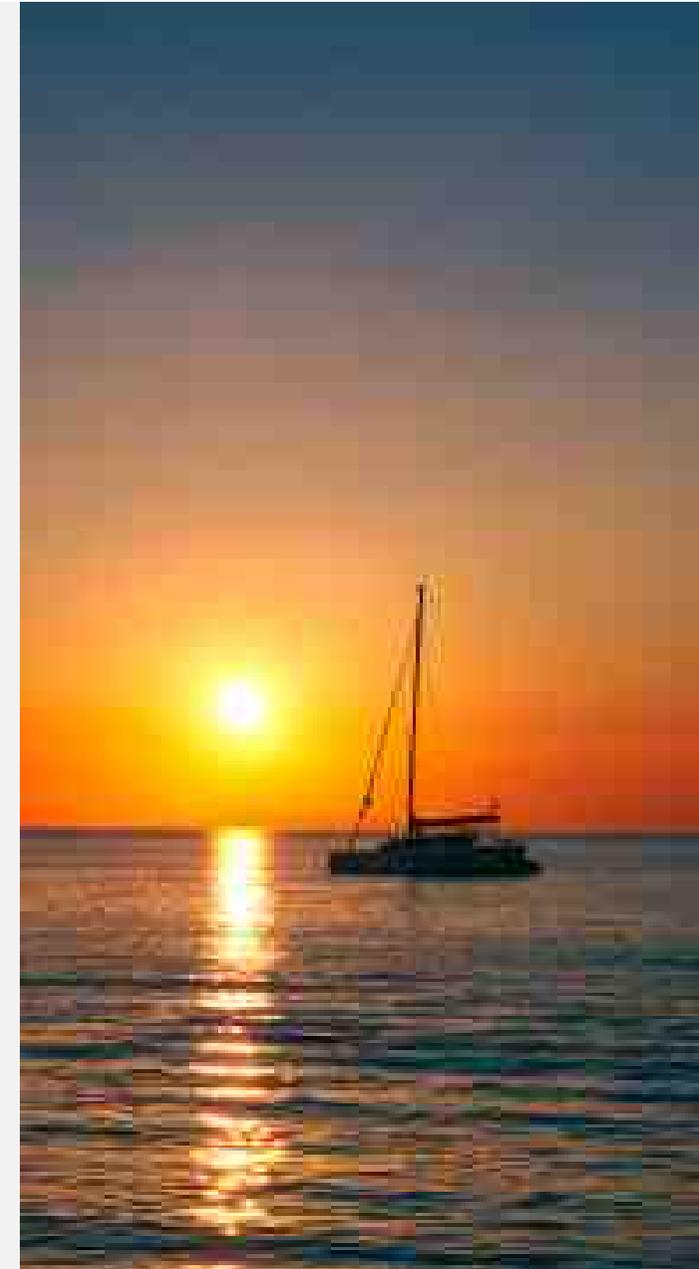
【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携挙、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15~16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 Ⅱコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

← いまだ再臨されない
主イエスに重なる



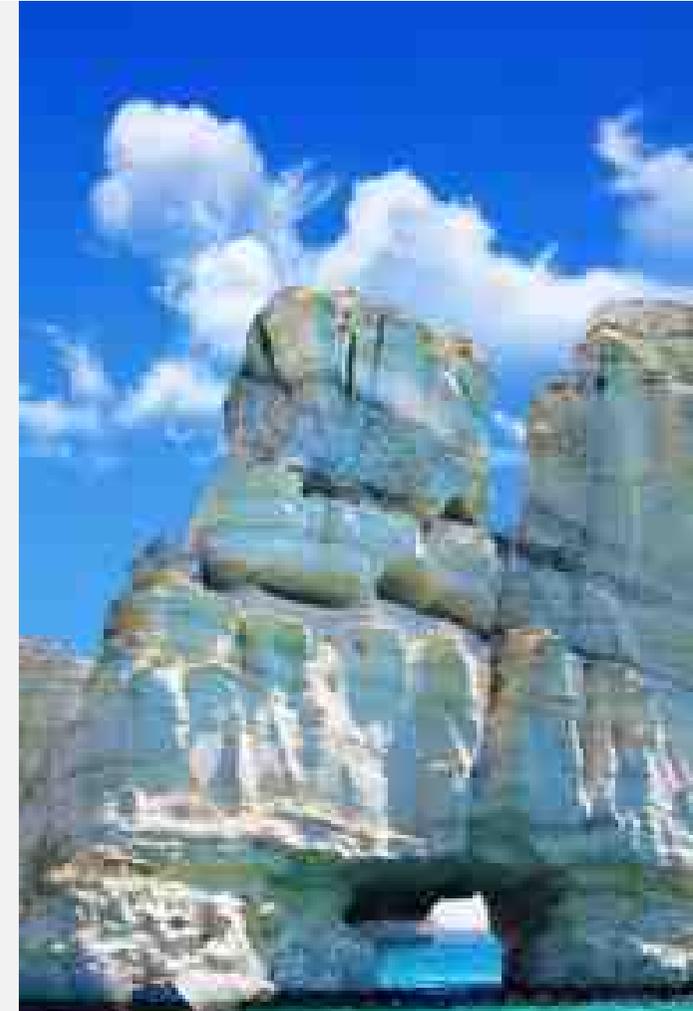
主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 II コリント1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。

パウロが促すのは、
自発的な応答





IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくはは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➡遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活した^{しん}こと、を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの 脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年
(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

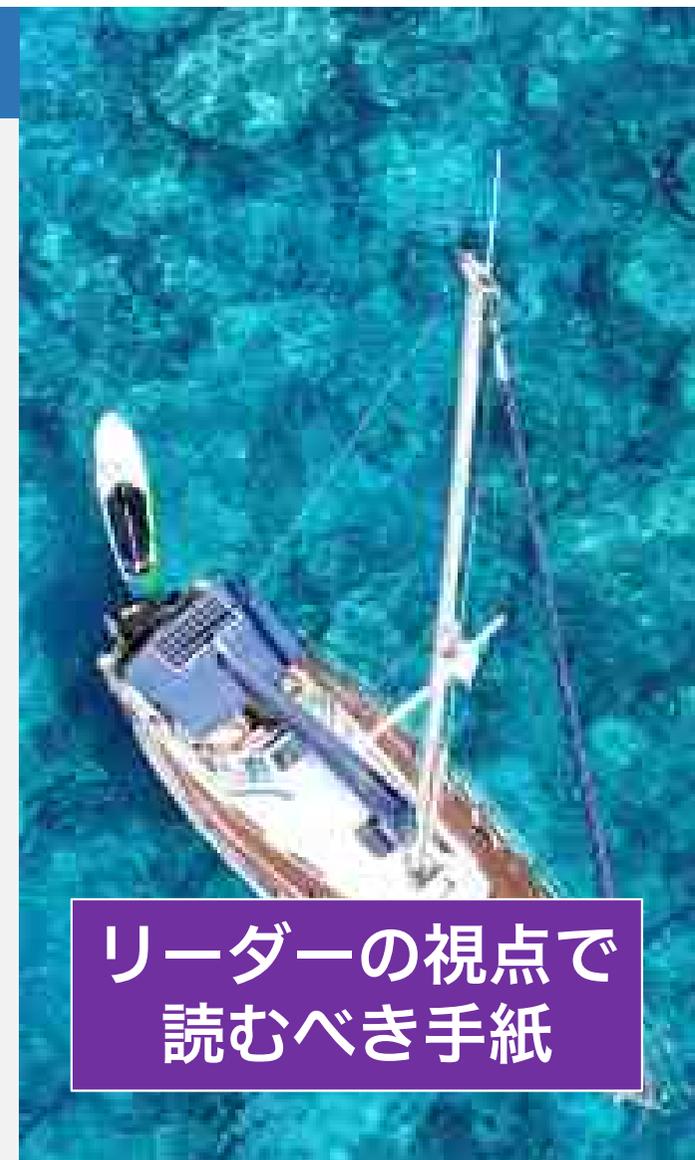
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶 IIコリント1章1～2節

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 II コリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

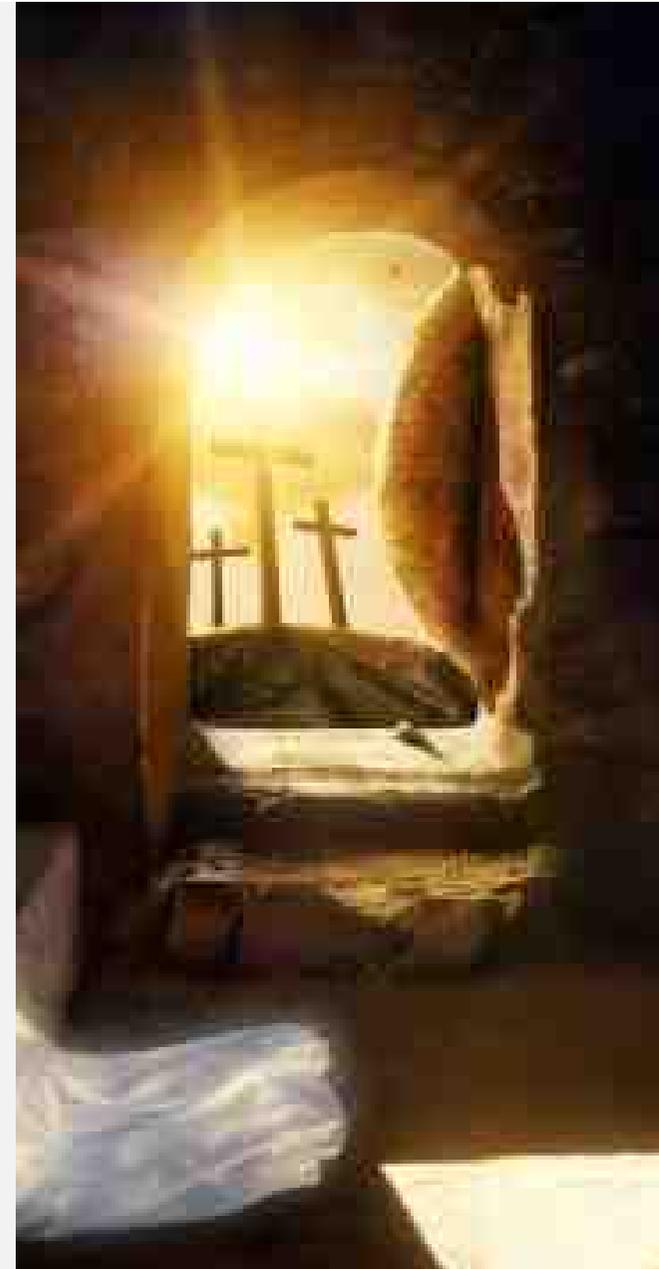


エペソの遺跡

【死の宣告】 II コリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携拳、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15～16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 IIコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

← いまだ再臨されない
主イエスに重なる

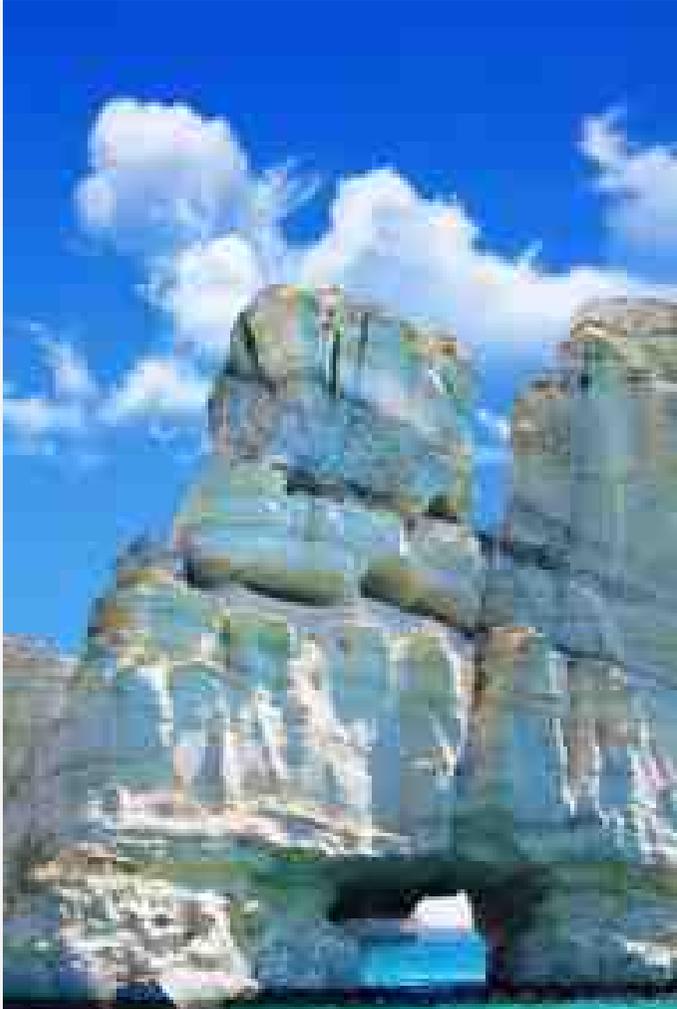


主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 II コリント 1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。



パウロが促すのは、
自発的な応答



IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくはは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➡遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活した^{しん}こと、を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの 脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※ 第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年

(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



海を挟んで約250km
陸路を廻れば約1,000km

【コリントとコリント教会】

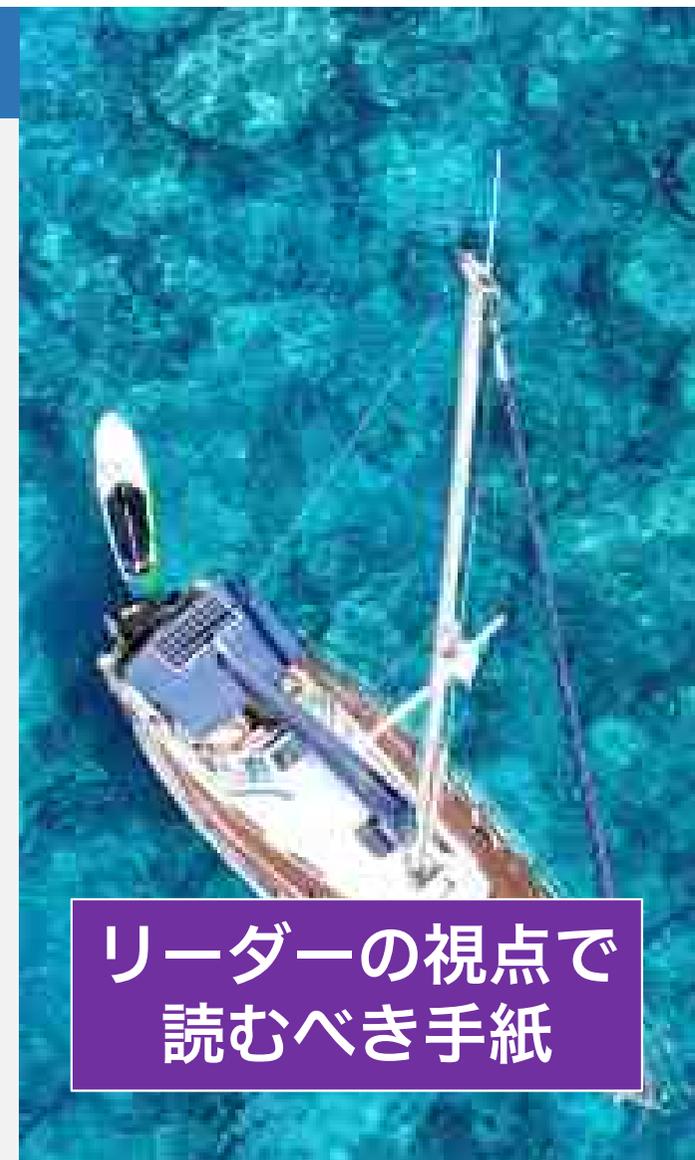
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- **不道德**の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。 **偶像崇拜**が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶

Ⅱコリント1章1～2節

ペリピの円形劇場

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



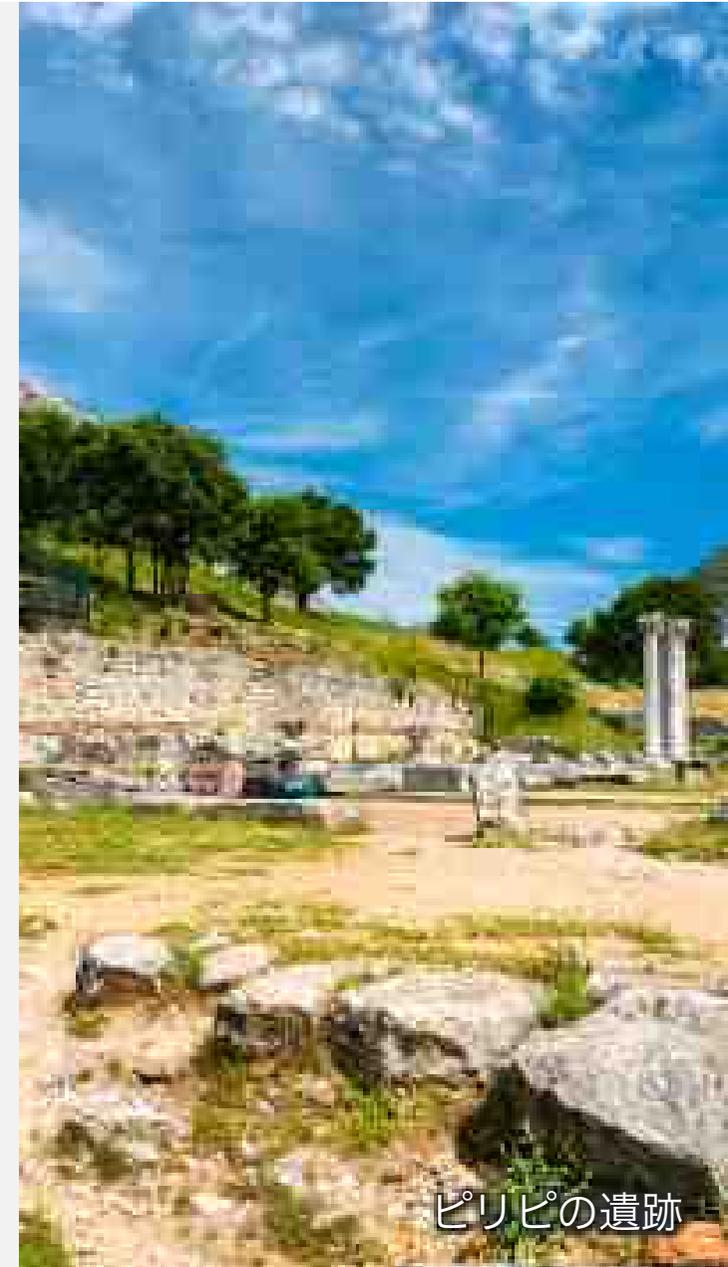
【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 Ⅱコリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

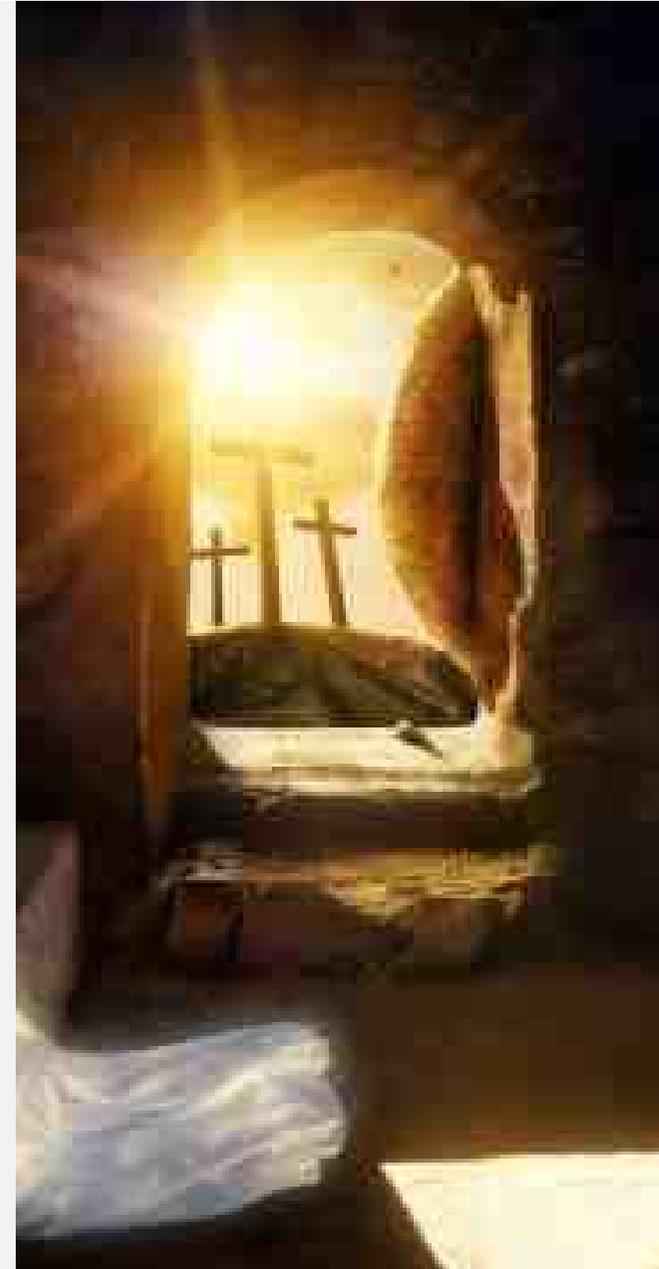


エペソの遺跡

【死の宣告】 II コリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携拳、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

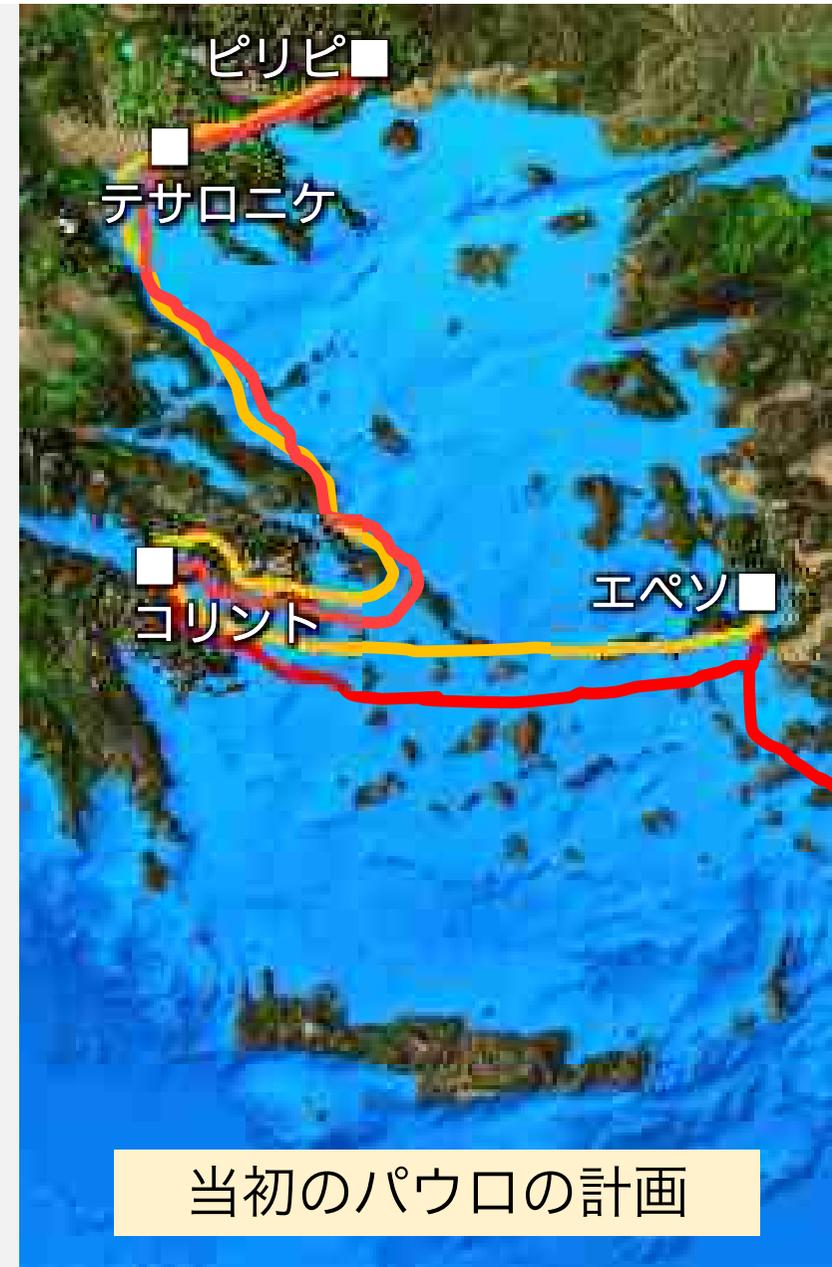
主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15~16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 IIコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

いまだ再臨されない
主イエスに重なる

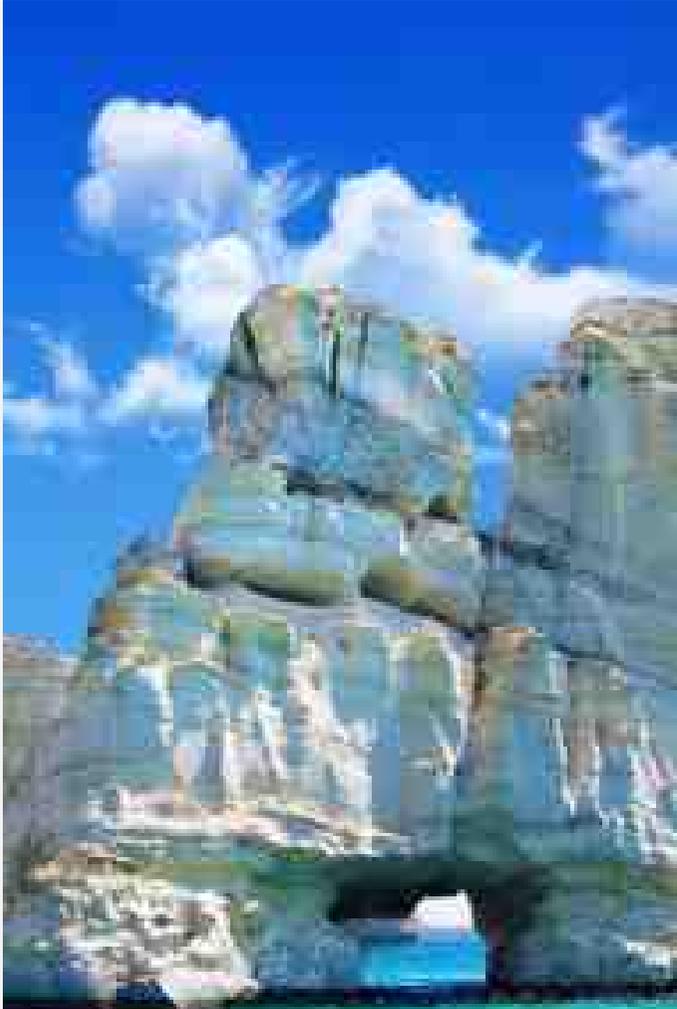


主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 II コリント 1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。



パウロが促すのは、
自発的な応答



IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➡遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活した^{しん}こと、を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの 脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※ 第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年

(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

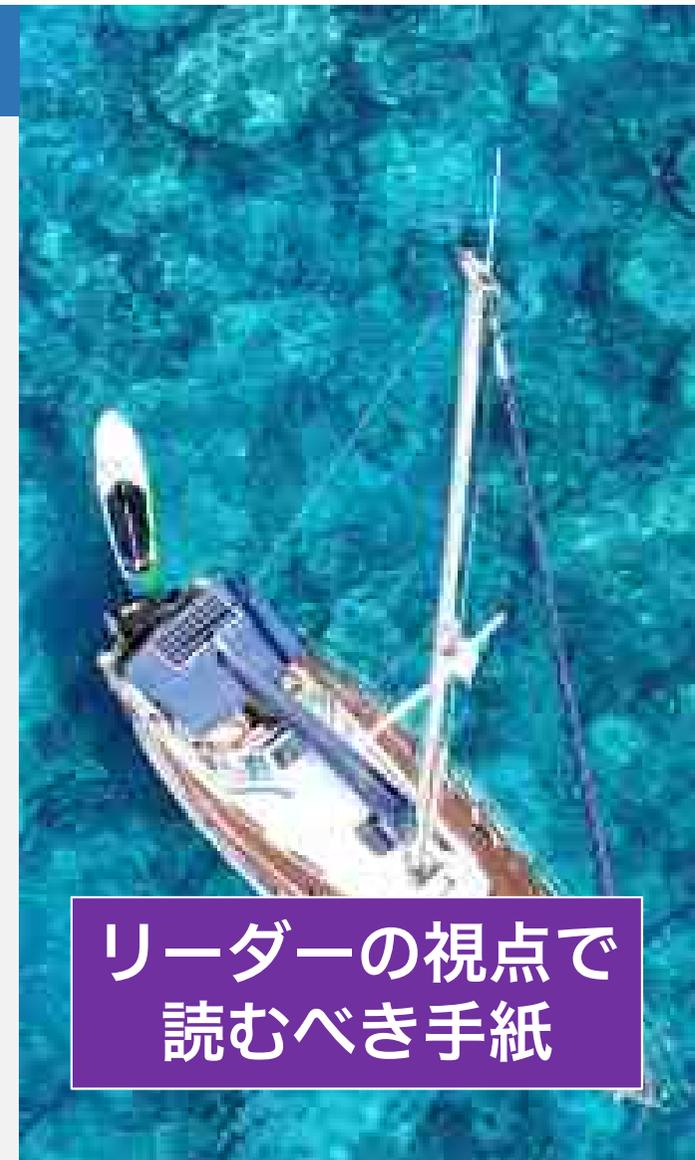
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶

Ⅱコリント1章1～2節

ピリピの円形劇場

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - 信者に内住される聖霊。
 - 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 Ⅱコリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

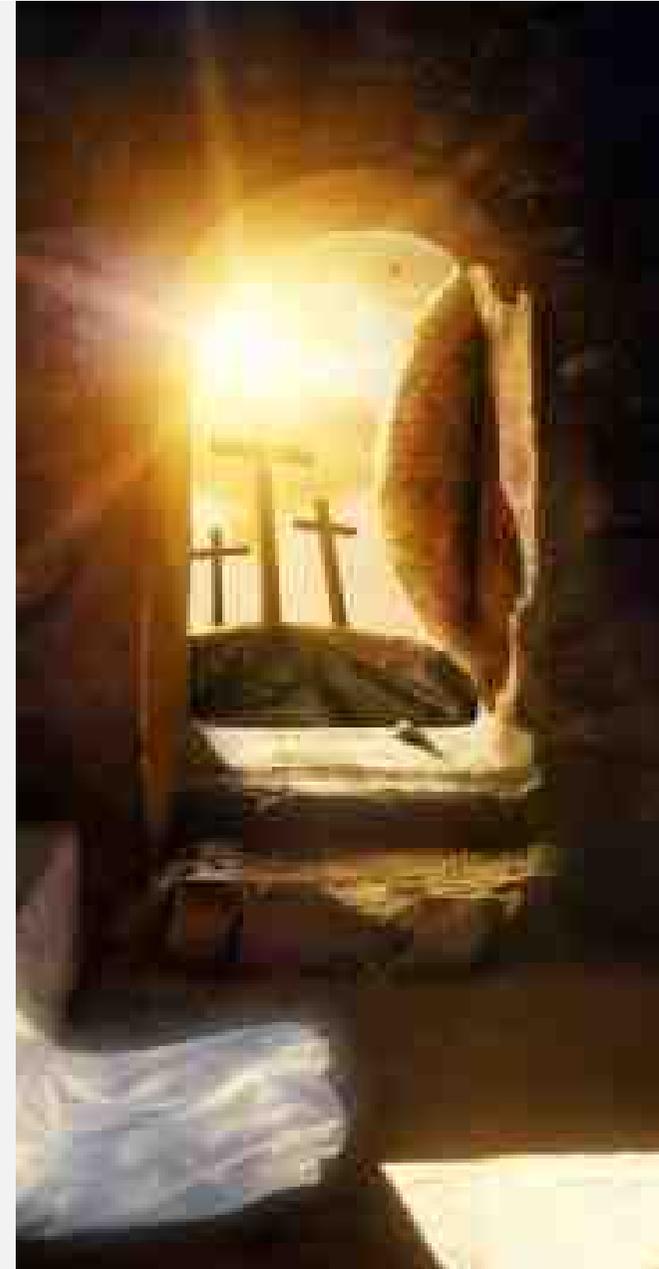


エペソの遺跡

【死の宣告】 Ⅱコリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携拳、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15～16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 IIコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

← いまだ再臨されない
主イエスに重なる



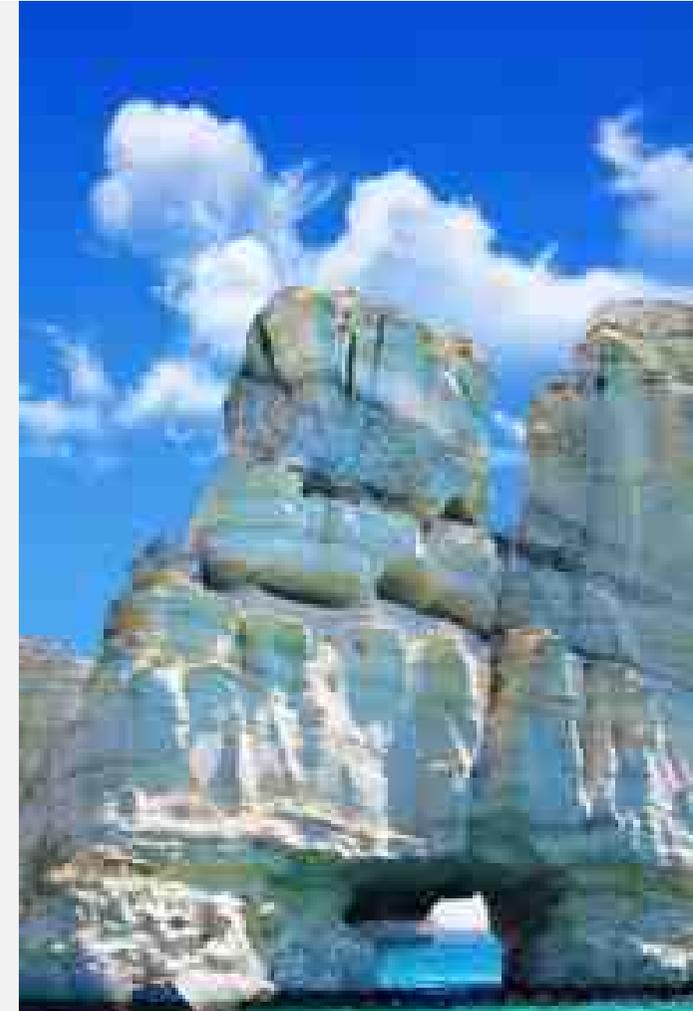
主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 IIコリント1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。

パウロが促すのは、
自発的な応答





IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➔遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活したこと、^{しん}を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの
脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年
(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

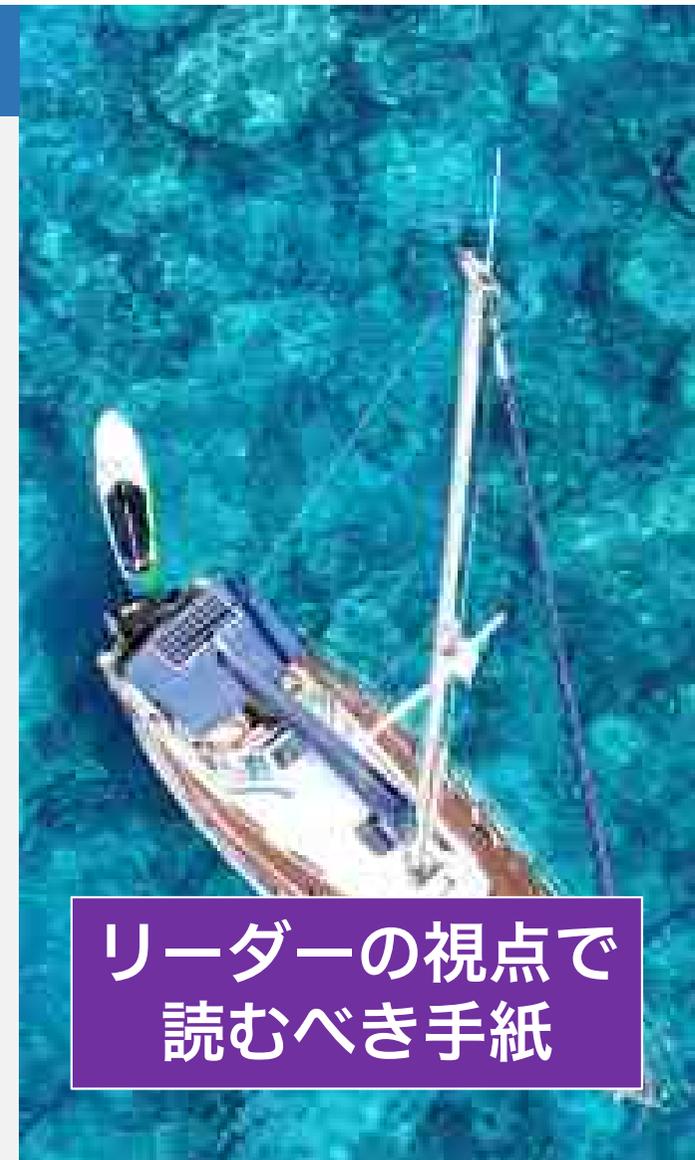
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶 IIコリント1章1～2節

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



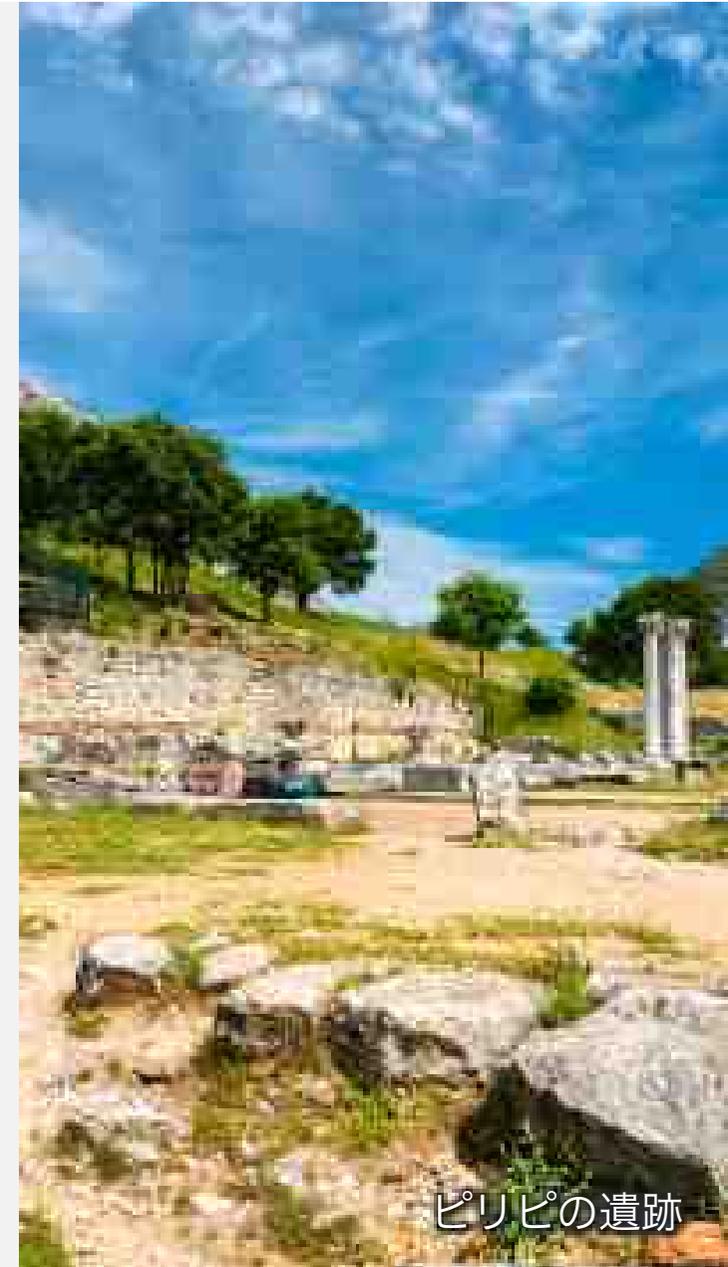
【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 Ⅱコリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

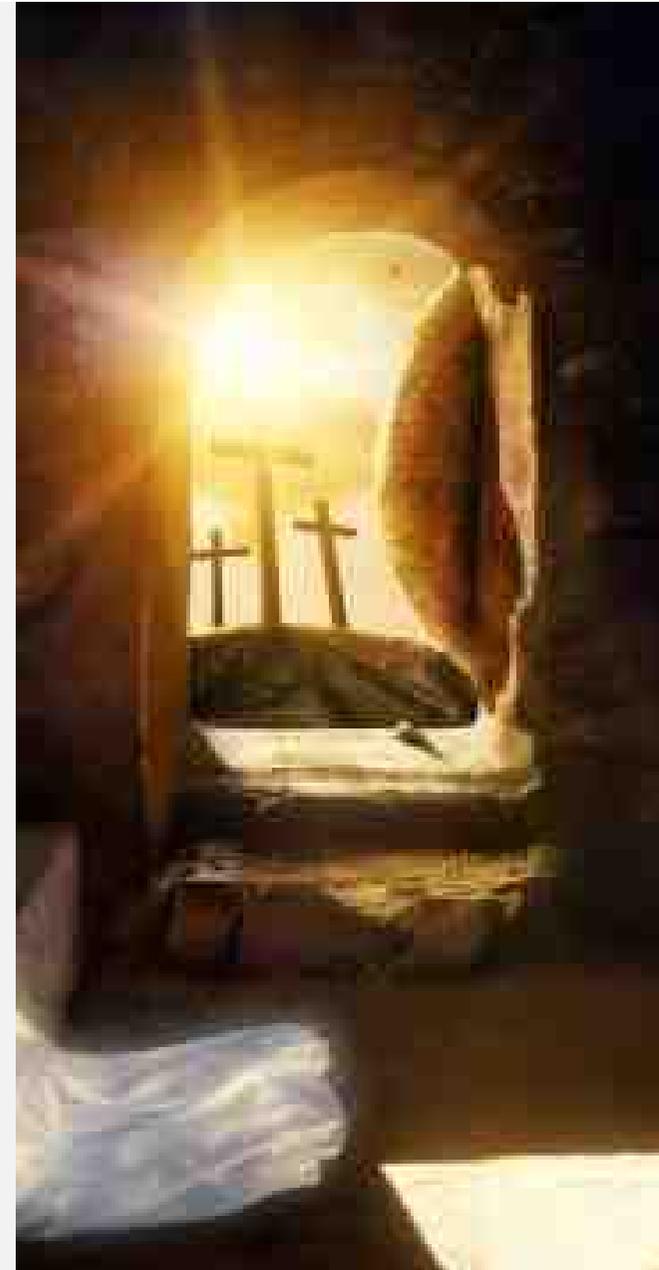


エペソの遺跡

【死の宣告】 II コリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

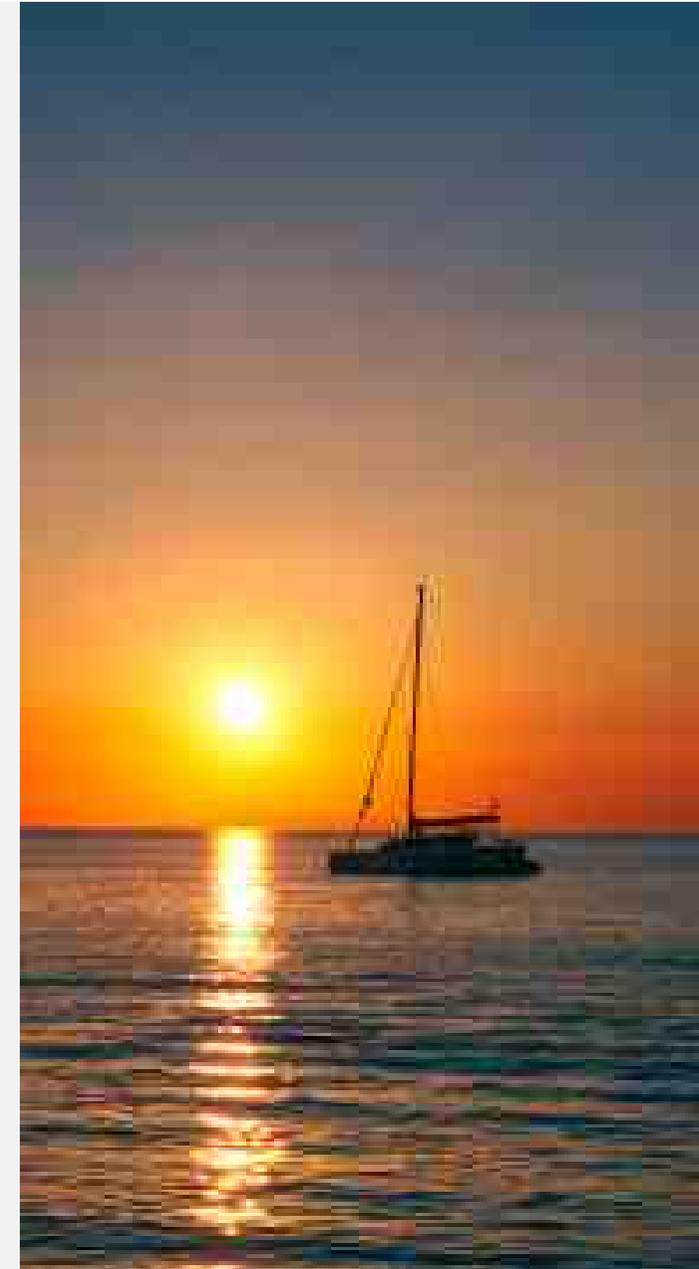
【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携拳、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15～16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 IIコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

いまだ再臨されない
主イエスに重なる

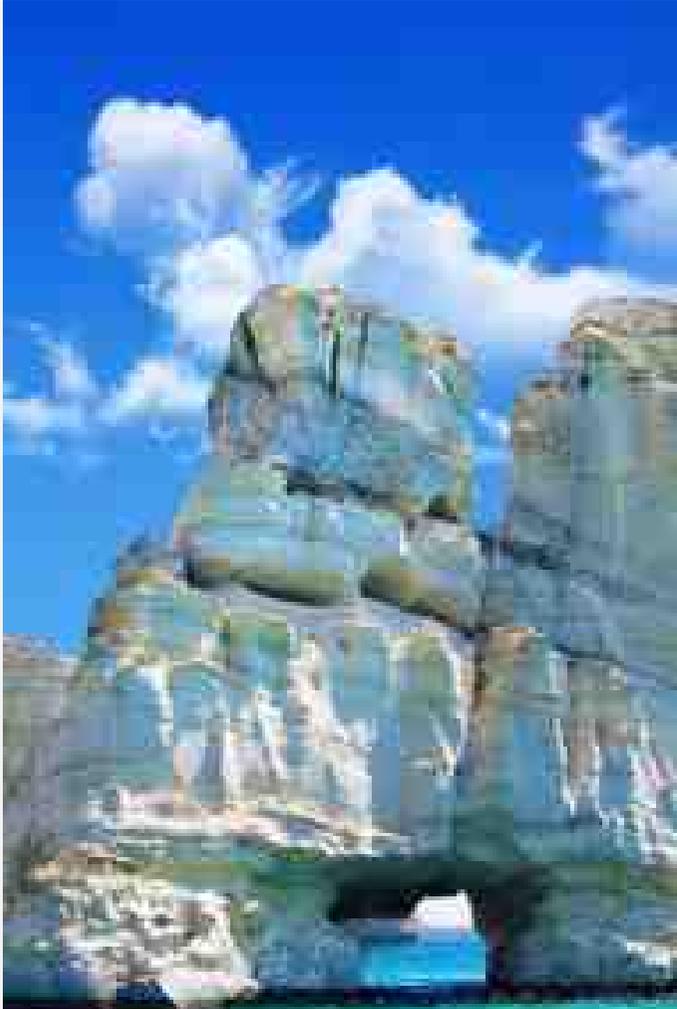


主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 IIコリント1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。



パウロが促すのは、
自発的な応答



IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくはは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➔遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ}罪^{あがな}を贖^{じゅうじか}うために十字架^しで死^しに、

②墓^{はか}に葬^{ほうむ}られ、

③三日目^{みっかめ}に復活^{ふっかつ}した^{しん}こと、を信^{しん}じます。

信^{うたが}じて歩^{まどわ}み始^{まどわ}めたはずの私^{わたし}を、疑^{うたが}い、迷^{まどわ}いが惑^{まどわ}わします。

誰^{たれ}かに責^{せきにん}任^おを負^おわせたい、依^{いぞん}存^{いぞん}の心^{こころ}が頭^{あたま}をもたげます。

主^{かだい}が与^{あづか}えられた課^{かだい}題^{だい}に、向^{むか}き合^あいますから、

打^うち砕^{くだ}かれたとき^{とき}には、恵^{めぐ}みと慰^{なぐさ}めで満^みたして^{して}ください。

さらなる力^{ちから}を得^えて、新^{あたら}たな一^{いっ}歩^ぽを踏^ふみ出^だすことが^{こと}できます^{でき}ます^{ます}ように。

主^きイエス・キリストのみ名^なによって祈^{いのち}ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの
脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年

(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

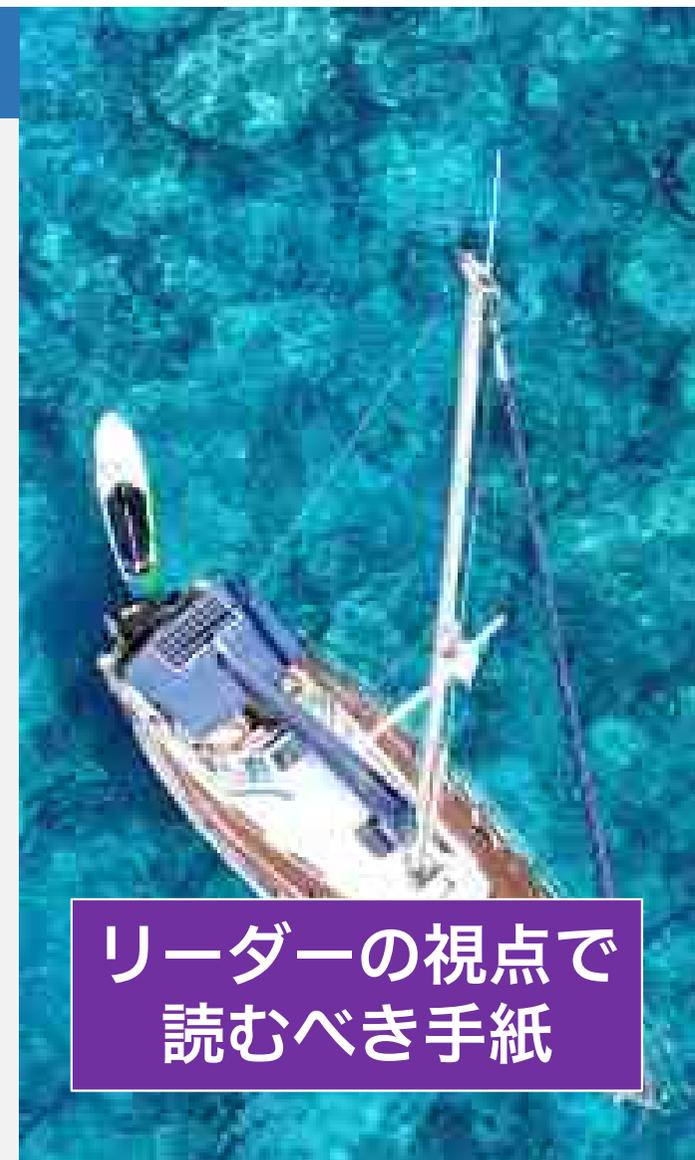
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶 IIコリント1章1～2節

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 Ⅱコリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

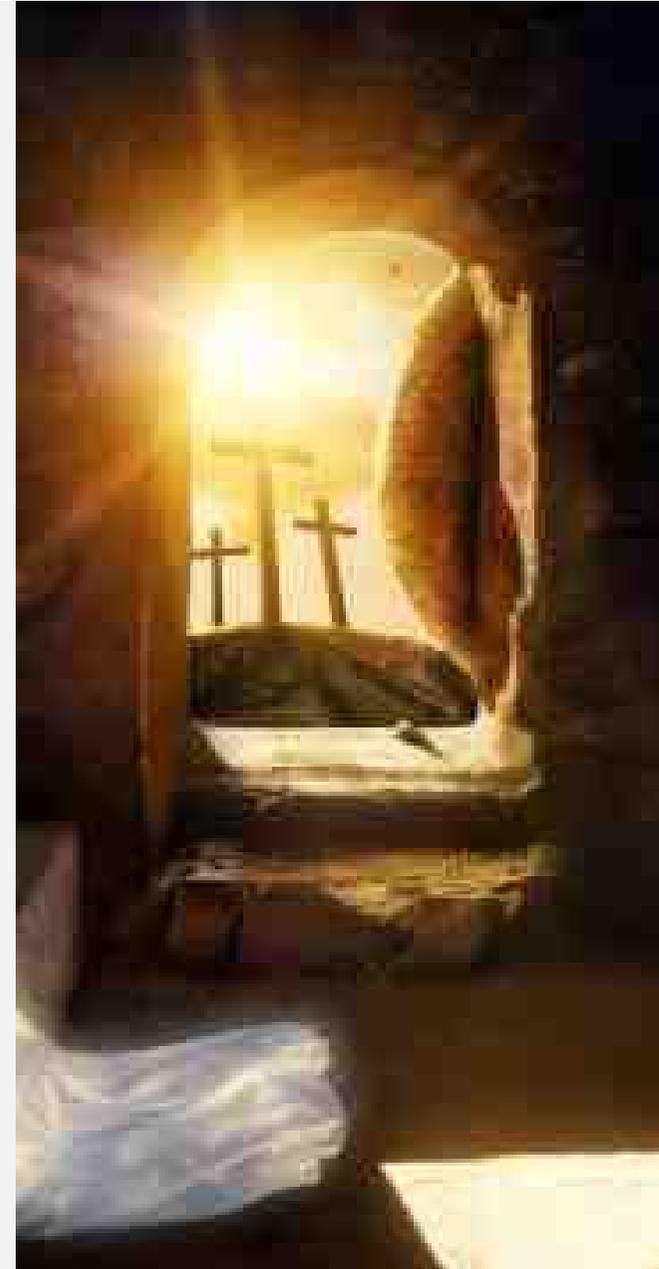


エペソの遺跡

【死の宣告】 II コリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携挙、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15～16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 Ⅱコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

← いまだ再臨されない
主イエスに重なる

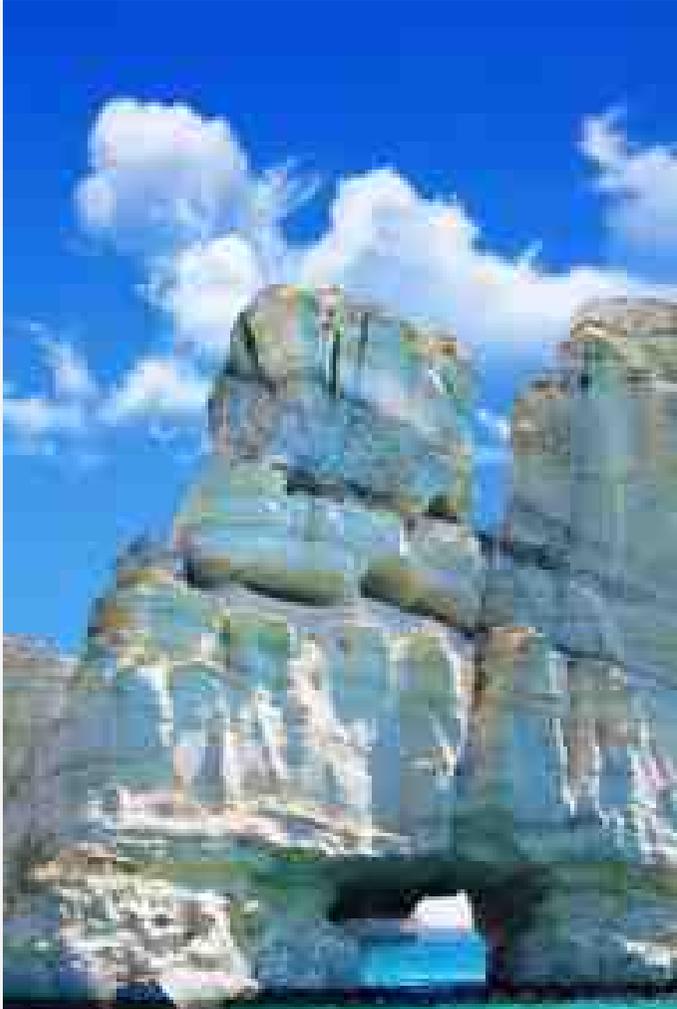


主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 IIコリント1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。



パウロが促すのは、
自発的な応答



IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➡遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活した^{しん}こと、を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの 脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※ 第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年

(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

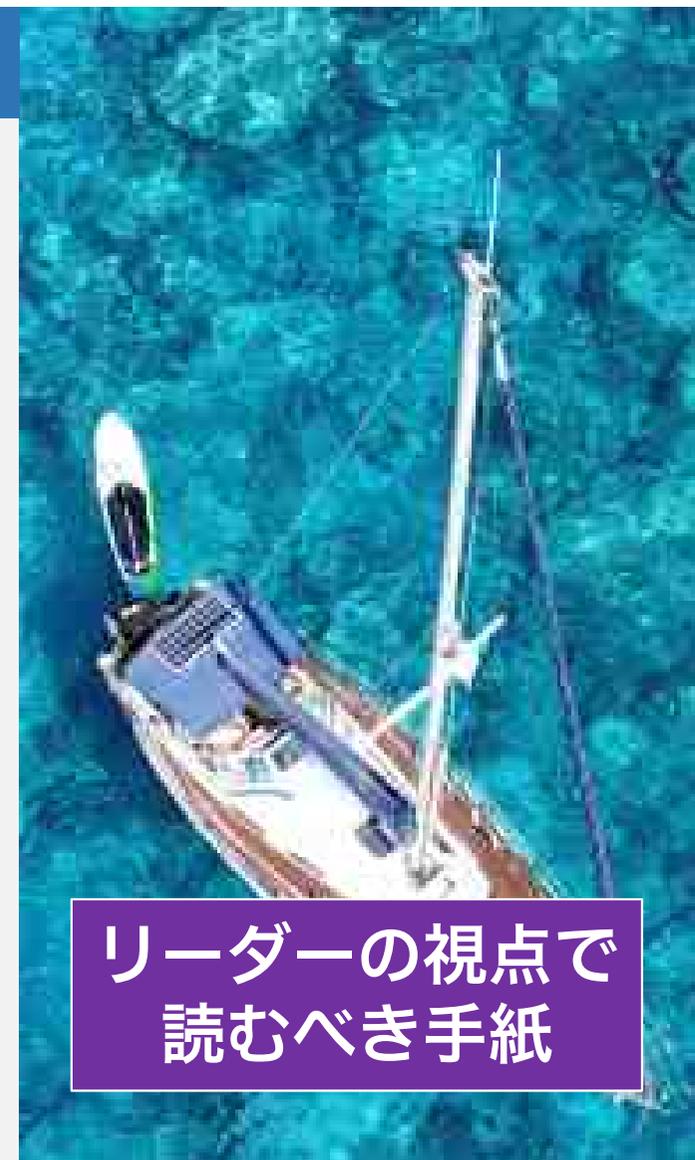
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶 IIコリント1章1～2節

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



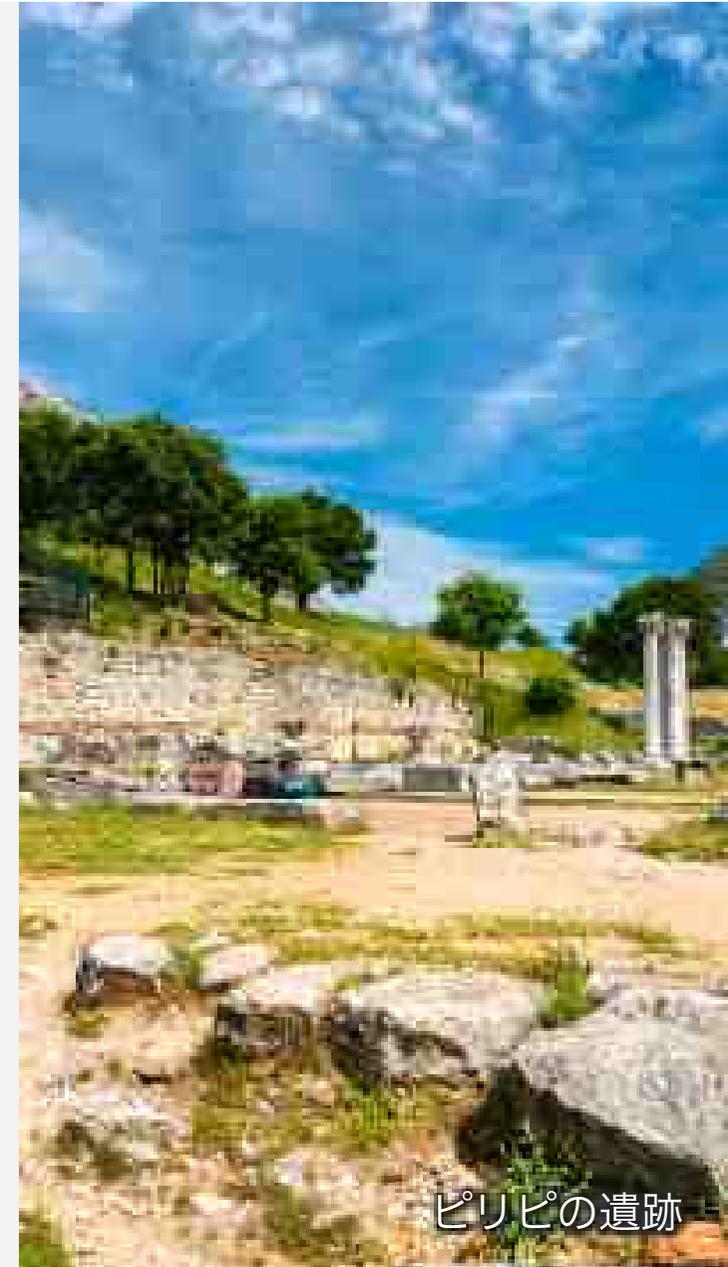
【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 Ⅱコリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

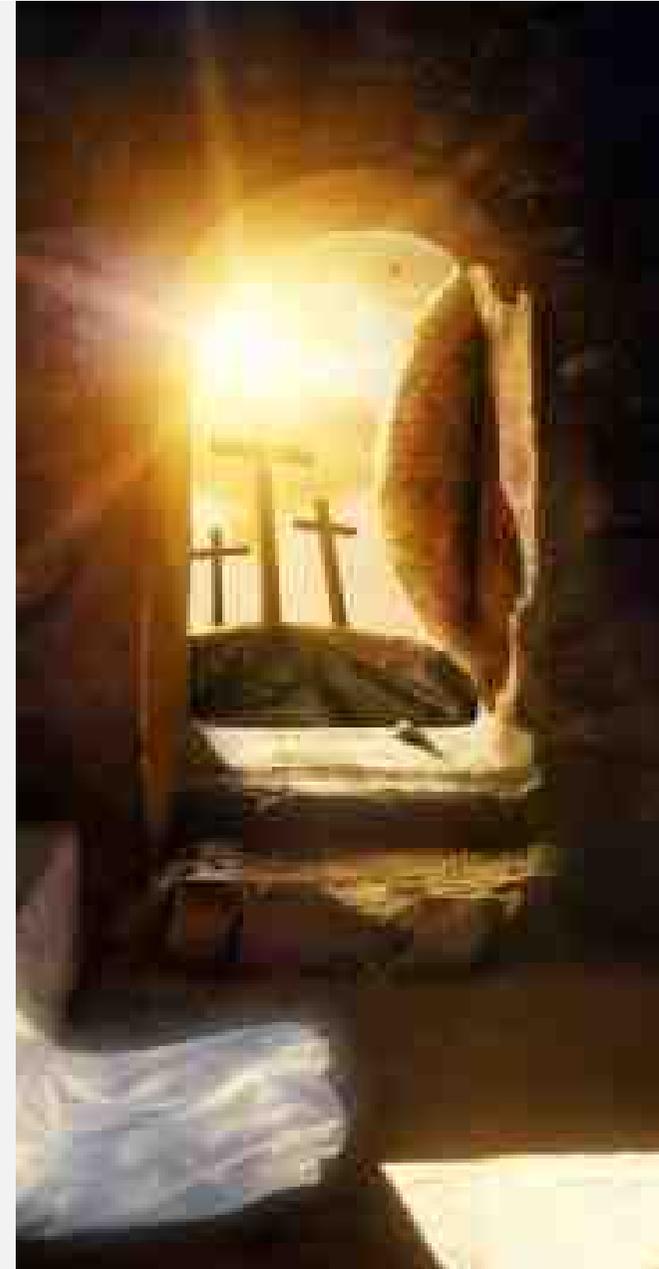


エペソの遺跡

【死の宣告】 II コリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携拳、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

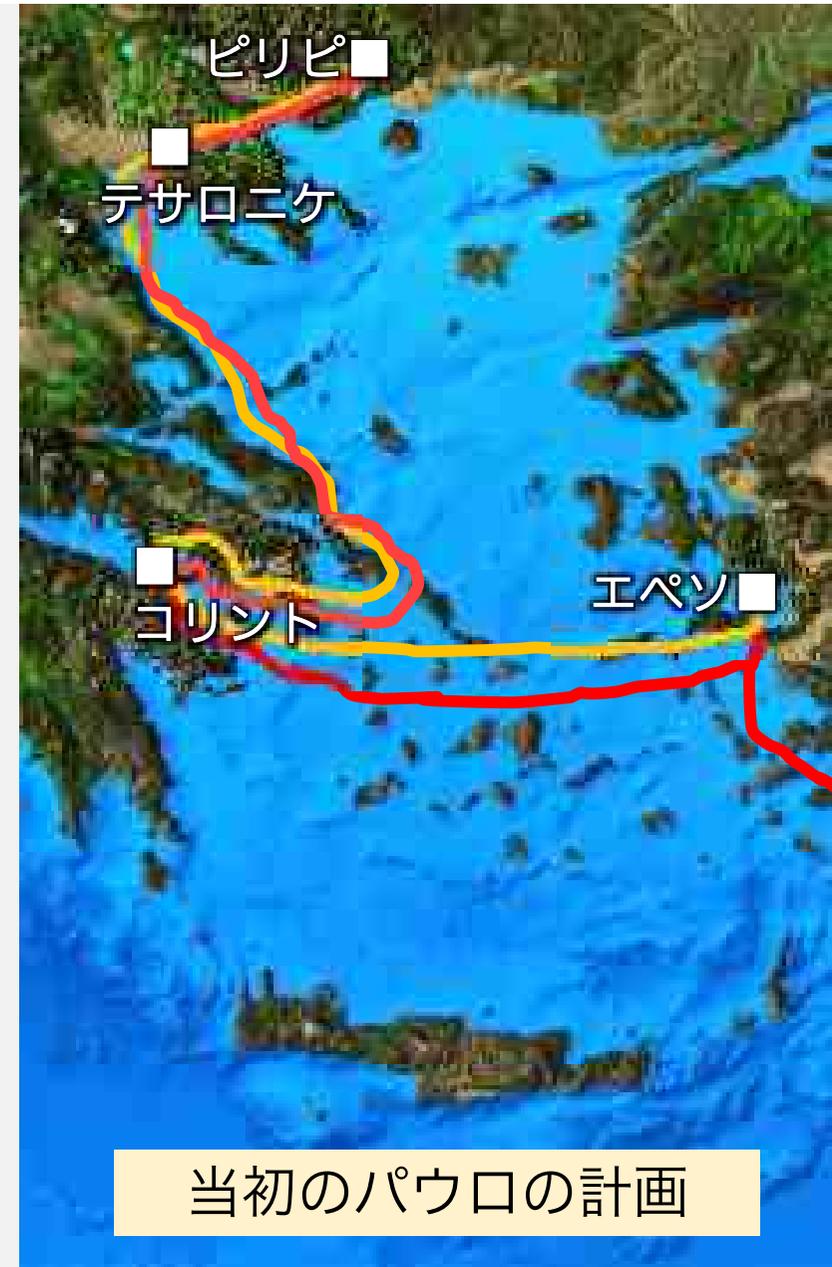
主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15～16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 IIコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

← いまだ再臨されない
主イエスに重なる

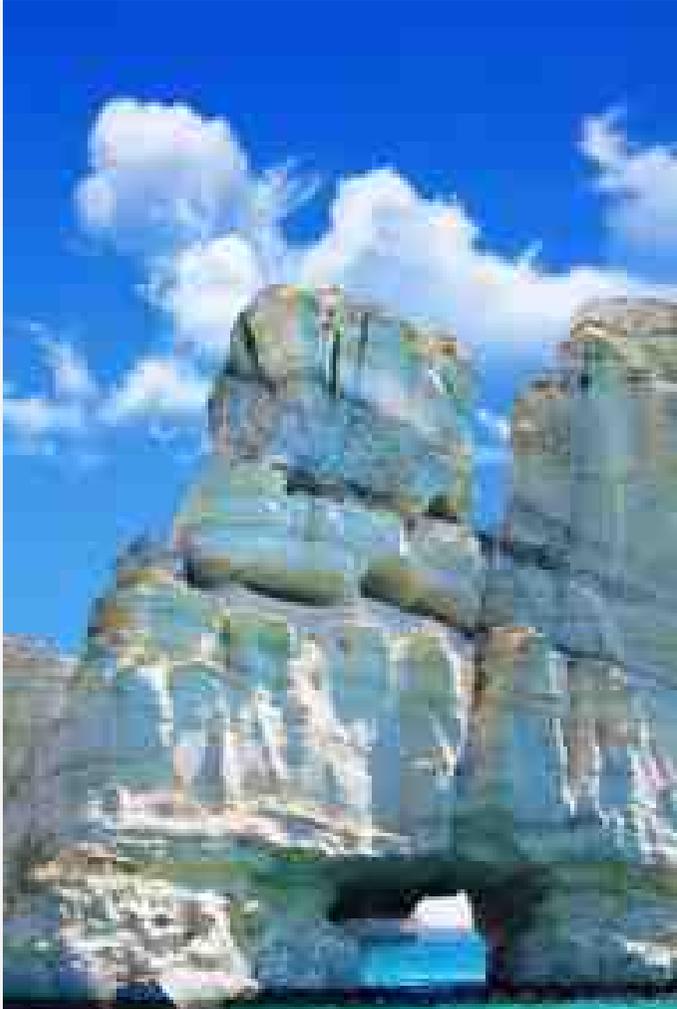


主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 IIコリント1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。



パウロが促すのは、
自発的な応答



IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しでも引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➔遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活した^{しん}こと、を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」

コリント

第二

①

「依存からの
脱却を求めて」

コリント人への手紙Ⅱ 1章

挨拶

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 挨拶 1～2節
- II. 苦難の結果 3～11節
- III. 批判への応答 13～18節
- IV. 「はい」か「いいえ」か 19～24節
- V. まとめと適用
依存からの脱却を求めて



コリントの手紙第二とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …第一(55年)の2年後、57年頃。
- **執筆場所** …コリントへの途上、ピリピ。
- **対象** …コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **目的** …アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。



パウロのコリント訪問

- ① 最初のコリント訪問 (第二次伝道旅行)
1年半滞在 ~50年
- ② エペソ滞在中 (第三次伝道旅行) に
手紙を送付 (※第一の手紙以前)
第一の手紙を執筆 54~55年
(…コリント短期訪問? 55年)
- ③ コリントへの途上で (ピリピ?)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を執筆 55~56年
- ④ 三度目のコリント訪問 55~56年



【コリントとコリント教会】

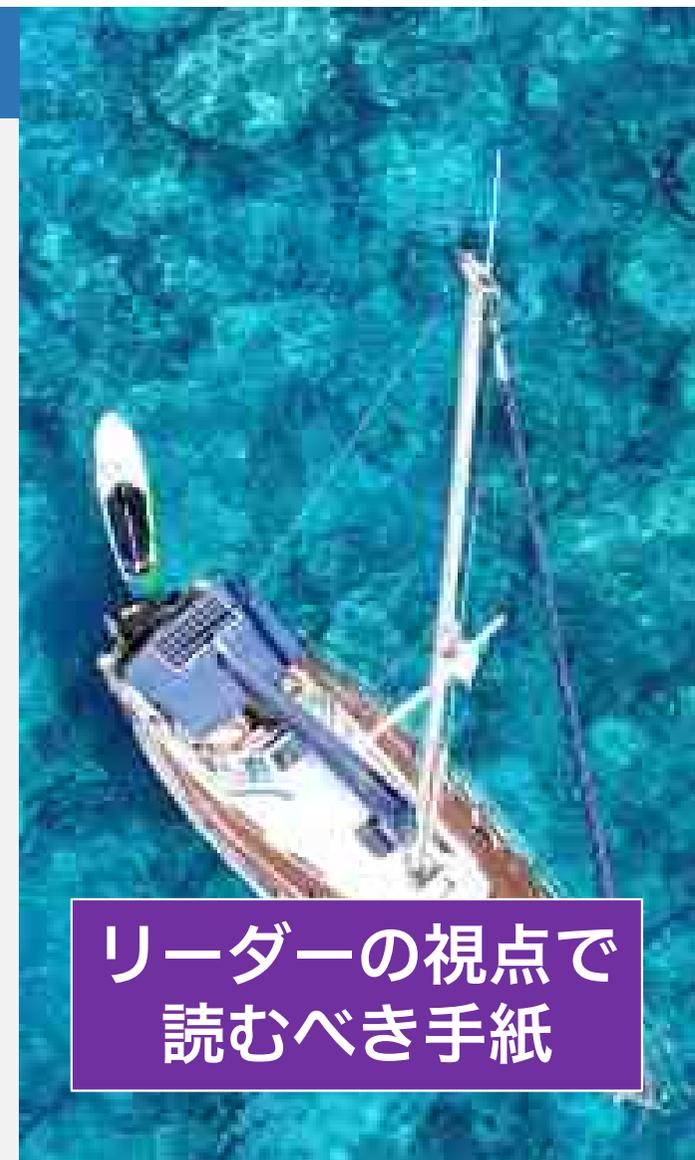
- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の町。少年への性愛、複数の愛人。
神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。
- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？



第二の手紙の特徴・テーマ

- 第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。
- 変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
 - ① グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
 - ② 残念なニュース…献金が集まっていない
 - ③ バッドニュース…パウロの使徒性への疑い
- **伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
→ **感情**が強く表れた手紙になっている。



リーダーの視点で
読むべき手紙

リーダーパウロの悩みと葛藤、思いをくみ取り、私の信仰を成長させよう



I. 挨拶 IIコリント1章1～2節

【差出人・宛先】 II コリント1:1

神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

■ 差出人は、パウロとテモテ

→ 口述筆記は、今回もテモテだろう。

■ 宛先は、コリントの教会、
アカイア州の諸教会
(コリントが州都)



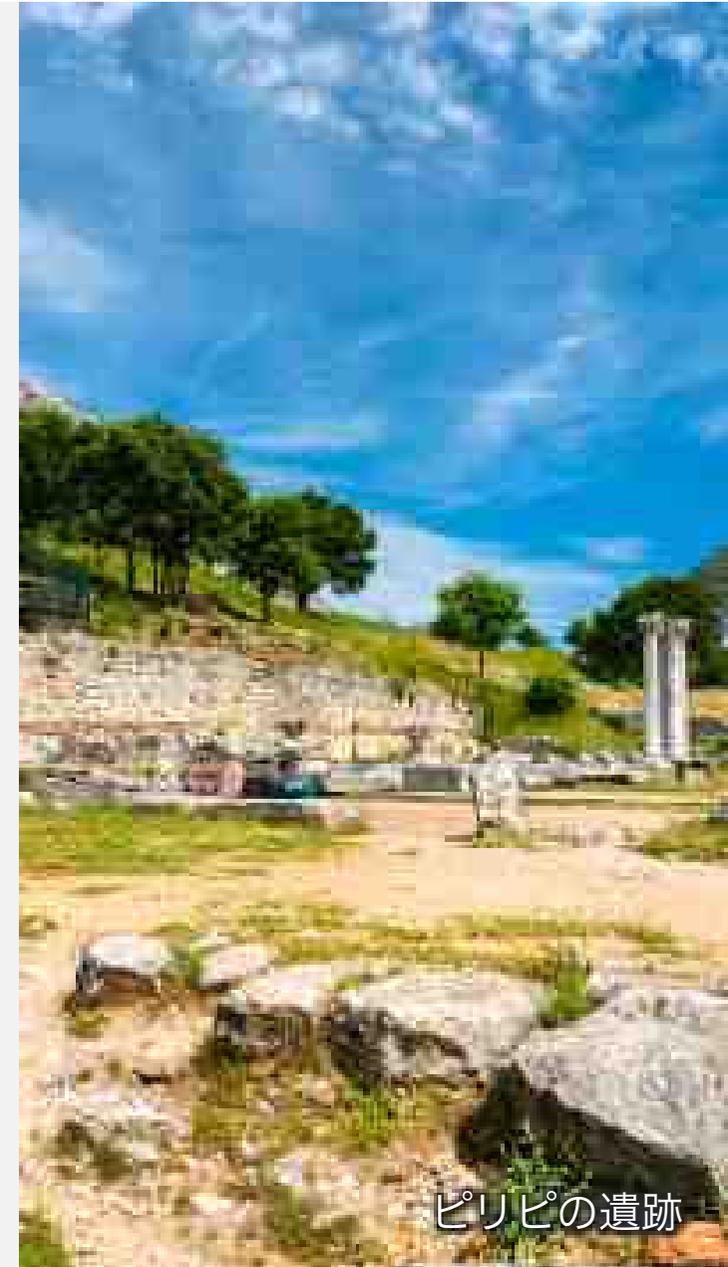
【祝福と賛美】 II コリント1:2

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安*があなたがたにありますように。

*ギリシャ式挨拶「恵みを」と

ヘブル式挨拶「平安を(シャローム)」の合体。

➡異邦人信者とユダヤ人信者双方を配慮



ペリポリの遺跡



Ⅱ. 苦難の結果

Ⅱコリント1章3～11節

【父なる神の賛美】 Ⅱコリント1:3

私たちの主イエス・キリストの父である神、
あわれみ深い父*、あらゆる慰めに満ちた神が
ほめたたえられますように。

*一言に示された父なる神のご性質。

■主ヤハウエは、義と愛の神である。

➔約束を守る父としての義なる神

➔憐れみ深い、愛なる神

■信仰者の試練と苦難の中でより強調される
慰めに満ちた愛なる神のご性質。



苦難の体験と成長が
親の愛を知らしめる

【苦難での慰め】 II コリント1:4~5

神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

■パウロが求めるのは、主の弟子としての共感。

→ 試練と苦難を通して、主の慰めを知る。

慰めを知り、成長し、慰める者となる。



【慰めのため】 IIコリント1:6

私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの**慰め***と救いのためです。私たちが**慰め**を受けるとすれば、それもあなたがたの**慰め**のためです。その**慰め**は、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

*パラカレオー …コリントIIで、18/109回。

(使徒の働きの伝道旅行のところでも頻出)

■ 信仰者は、苦難の中で、主の慰めを知り、慰めを知って、苦難に耐え抜く力を得る。

伝道旅行で、パウロが
味わい知らされたこと



【揺るがない望み】 II コリント1:7

私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- 現実には、コリント教会の混乱は続き、パウロへの風当たりは強まっている。
- パウロが断言する希望の根拠は？
 - ➔ 信者に内住される聖霊。
 - ➔ 世の終わりまで共におられる主イエス。



逆境の中で希望を告げるパウロの信仰

【アジア州での苦難】 Ⅱコリント1:8

兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難*について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

*エペソでの騒動か …使徒19章

■アルテミス神殿の銀細工人の抗議を機に、エペソ全体を巻き込む迫害・暴動に発展。

→惨劇目前で、事態は收拾された。

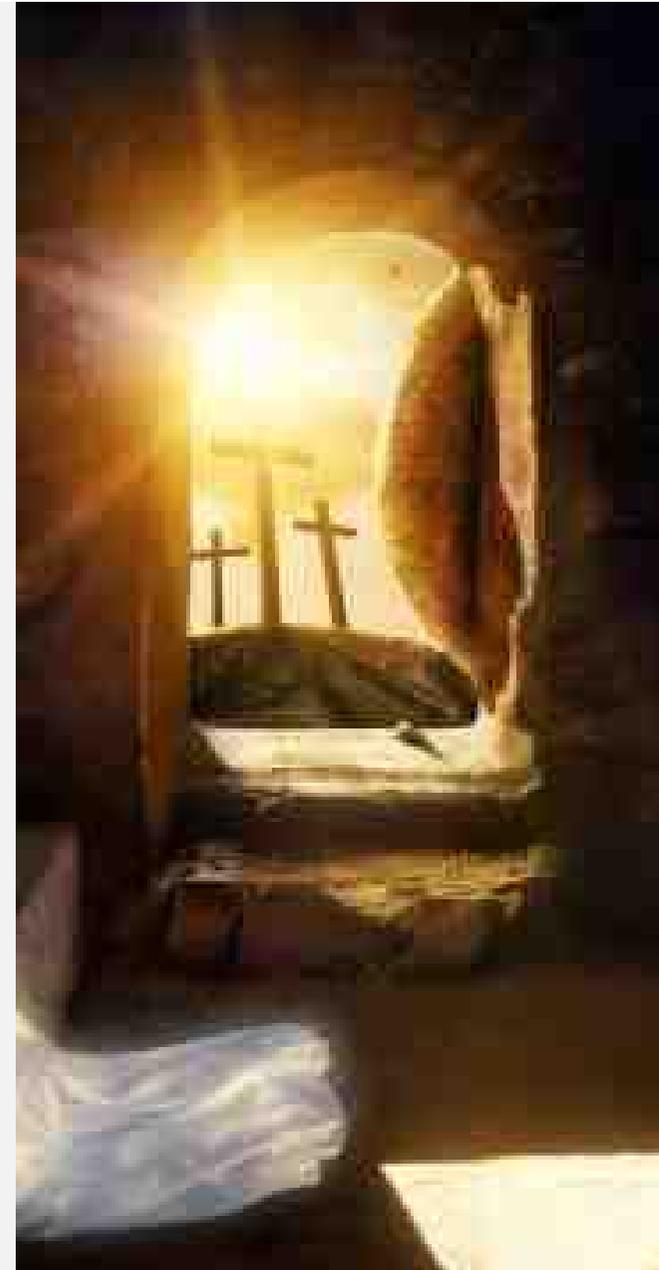


エペソの遺跡

【死の宣告】 II コリント1:9

実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- 死を覚悟したパウロは、ただ主に頼った。
- 死に直面させられた者の希望は、
死に勝利し、復活された主イエス・キリスト
この方だけにある。



【希望は神に】 II コリント1:10

神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

【パウロの確信とは？】

- 主の弟子には苦難があるが、
使命に歩む限り、必要は満たされ、支えられる。
- 必ず、救われる魂が起こされ、
イエスの御体なる教会は、携拳の瞬間まで
成長させられていく。



マタイ福音書6:32～34

あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。

苦難はある。使命に生きれば、必要は満たされ、支えられる。

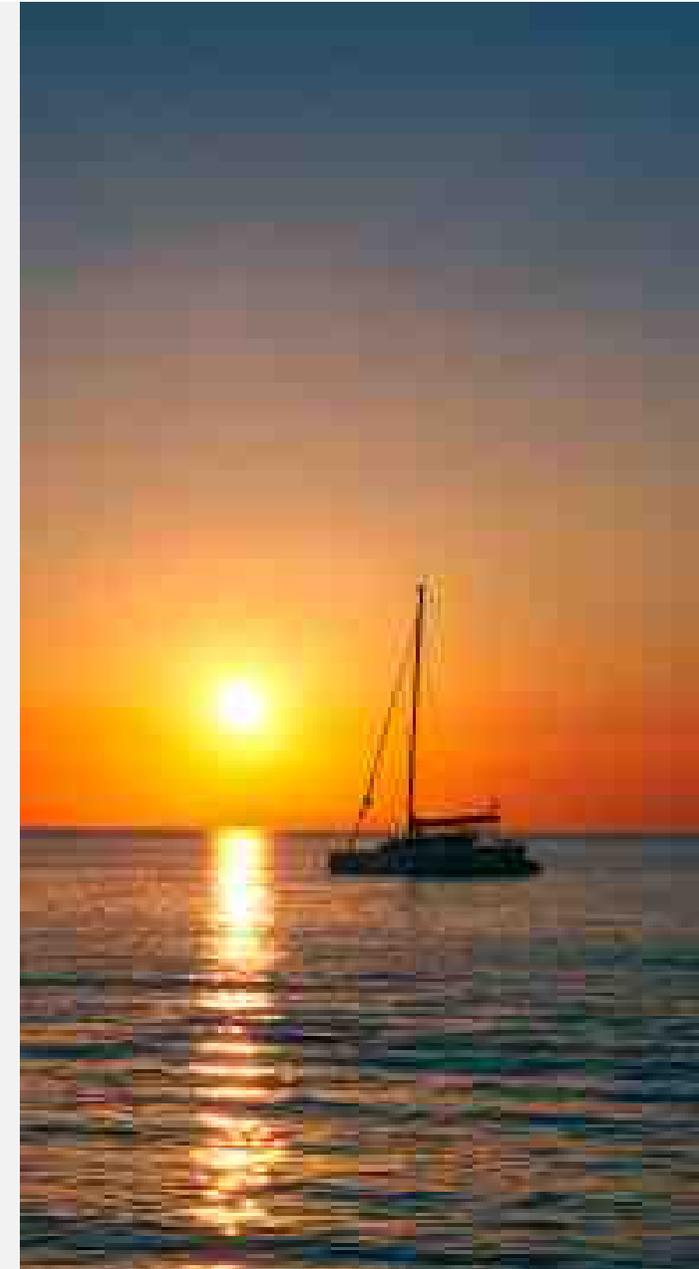
【悔い改めの恵み】 II コリント1:11

あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

■パウロが味わっている苦難は、コリントの信者の信仰の後退と混乱によるもの。

→彼らの悔い改めが不可欠。

■兄弟姉妹の悔い改めが教会の喜びになる。





Ⅲ. 批判への応答 Ⅱコリント1章13～17節

【パウロたちの誇り】 Ⅱコリント1:12

私たちが誇りとする事、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、**神の恵み**によって行動してきたということです。

■ 恵み(ヘセツド)は、**主の約束に基づく恵み**。

恵みの最たるものが、神の御言葉・聖書。

➔ パウロは、あくまでも御言葉に従ってきた。



【パウロの期待】 IIコリント1:13 14

私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません*。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの**主イエスの日***には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

*第一に記したのは、最初に教えた基本的教理。

*“主イエスが来られる時には”

→携拳、大患難、再臨。終末論の基本が前提。

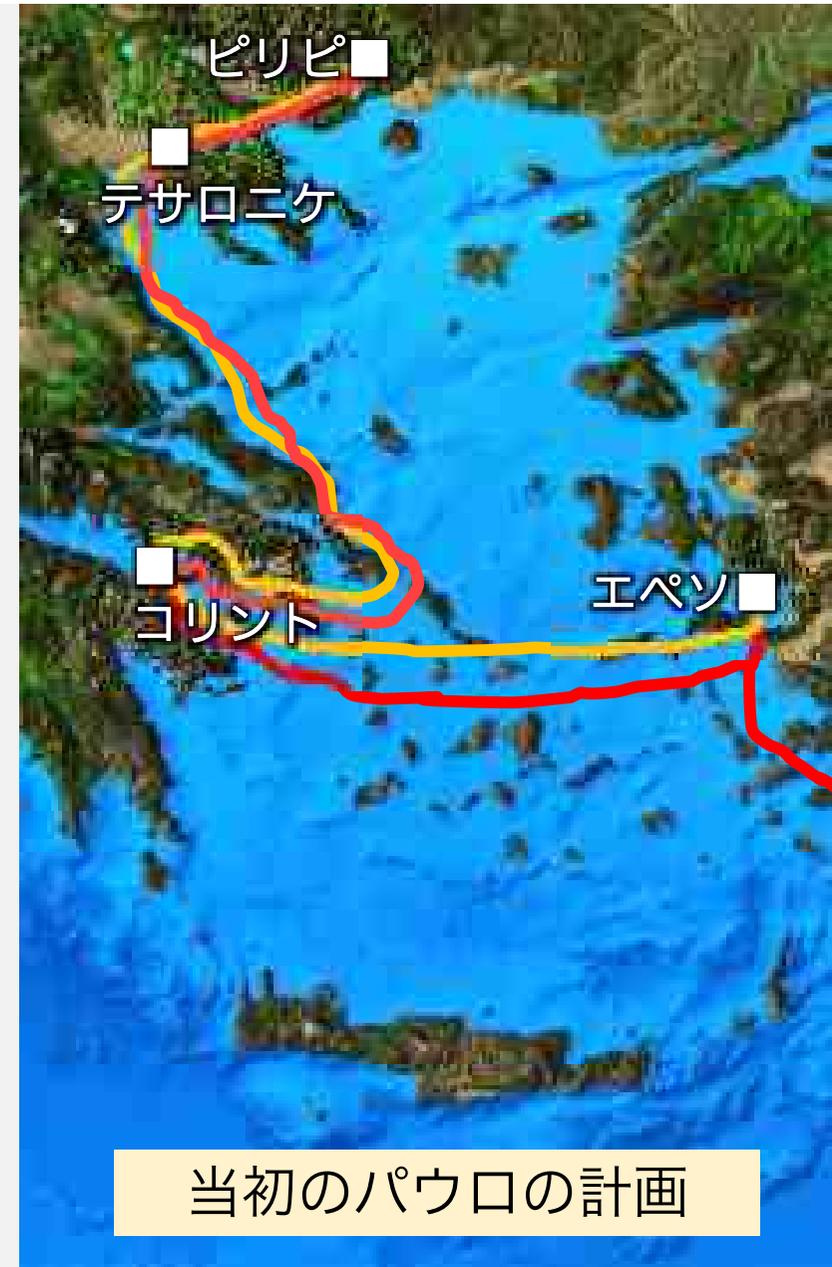
主の日、信仰者に
完全な一致が!!

【当初の計画】 II コリント1:15～16

この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。

すなわち、**あなたがたのところを*通って***マケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

■ 海路でエーゲ海を渡れる時期は限られる。
やむない事情で時期を逃してしまった。



【批判を受けて】 IIコリント1:17

このように願った私は軽率だったのでしょうか。
それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

■ ここからうかがえるパウロへの非難

「約束を破った」「軽率に約束した」

「二枚舌だ」「裏表がある」

■ パウロは、嘘つきなのか？ 不誠実なのか？

使徒に、そんなことが可能なのか？



弁明の必要を
迫られるパウロ



IV. 「はい」と「いいえ」 IIコリント1章18～24節

【真実は一つ】 II コリント1:18

神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である*、というようなものではありません。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

*ギリシャの弁論術では、詭弁も常用された。

■キリストの福音には、真実だけがある。

使徒の手紙は、裏読みせず、真っ直ぐ受け取るべき。



パウロの手紙は
皮肉はあっても
詭弁はない

【神の約束の確かさ】 II コリント1:20~21

神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

- メシア預言はすべて、聖書の通り成就された。
→ 信者の応答は、「アーメン」の一言でいい。
- 神ご自身が、私たちを救い、主イエスの弟子、御体の一部としてくださっている。



【主イエスの証印】 II コリント1:22～23

神はまた、私たちに証印*を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりから*です。

*“ブランド(英)”…家畜の焼き印。所有者の印。

*裁かないでよいように、
忍耐して悔い改めを待っている。

← いまだ再臨されない
主イエスに重なる

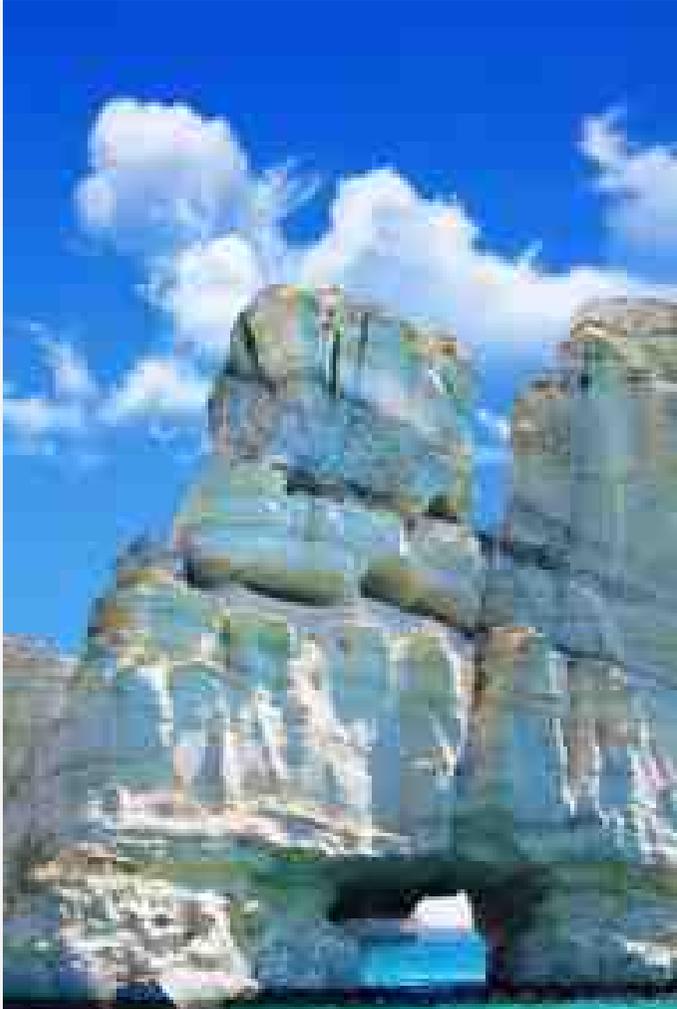


主イエスというブランドをまとったのが、私たちクリスチャン

【協力者として】 IIコリント1:24

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- クリスチャンを支配するのは、主だけ。
私と主の間には、誰も入り込めない。
- 支配と依存の関係を生きている人間の現実が。
古い習慣を引きずる信仰の幼子は、依存的。
→ 依存ゆえに、支配と感ずることがある。



パウロが促すのは、
自発的な応答



IV. まとめと適用

依存からの脱却を求めて

パウロが誤解される背景を考える

- 基本的教理を伝えたのが「第一の手紙」 → 内容に反論の余地はない。
- コリントの人々の批判は、パウロに対する個人攻撃だった。
「権威的」「偽善」「二枚舌」「信用ならない」「使徒の資格はない」…
→ 誤解や曲解にもとづく感情的な反発で、具体的な根拠はない。
- 聖書(旧約)と主イエスの御言葉を土台に記されたのが、使徒の手紙。
→ 感情的な反発は、受取り手の信仰の幼さの表れ。
→ パウロの手紙に反発するのは、信仰の幼子、もしくは不信仰者。
例) 60～70年代に広がった、自由主義神学の「パウロ批判」

パウロの手紙の表現が教える、信仰者の自立の原則

- あくまでも自発的な決断を促しているパウロ。それしかできない。信仰は、自発的な応答。押しても引いても相手を動かさせはしない!!
- パウロの痛烈な皮肉も、正しい決断、悔い改めを切に望むがゆえ。
※神も皮肉を用いられる。 例)バベルの塔事件
➔遠回しな表現で気づきを促し、強烈に心に焼き付けるため。
- 聖書の命令は絶対。一方、具体的な状況での適用は、一人一人が自分で判断して、決断すべきこと。自立が求められる。

自立したくないコリントの信仰者たち

- 世の人々の関係性は、支配と依存。
例) 支配的なカルト指導者を支えているのは、依存的な信者たち
- 聖書が求めるのは、自立と共生の関係。
ただ主に従い、主との関係を柱に自立し、
主にあって自立した者同士、共生するのが、キリストの教会。
- 信仰の幼子は、依存を脱し切れていない。
自分のなすべき決断を、指導者のせいにする。
➔ パウロを個人攻撃するコリントの人々は、まさに信仰の幼子。

コリントの手紙第二が私たちに促していること

- 私たちは、信仰を成熟させ、自立に至っているだろうか？
教会や指導者への批判で盛り上がってばかり、なんてことはない？
- 身につけた聖書知識に応じ、リーダーの視点と責任を身につけよう。
クリスチャンは誰も、誰かに対してリーダーの責任を負っている。
未信者を信仰に、信仰の幼子を成長に、促し、共に歩む責任がある。
- 他者の信仰は、どうにもできないが、それでも離れられない責任がある。
未信者の家族や友人、信仰が後退した兄弟姉妹…
→人々に対する葛藤こそ、あなたのリーダーとしての責務を示すもの。

リーダーとして自分自身を育んでいこう

- 世の光、地の塩であるクリスチャンには、人々を導く責務がある。私自身が、依存から脱し、自立しなければ、一体何ができるだろう。
- 困難や苦難を嘆くのでなく、そこに与えられた使命をくみ取ろう。主の慰めは、その苦難に向き合う時に初めて与えられる。
- 苦難に向き合えば、まず打ち砕かれるだろうが、それでいい。砕かれるほどに、主の恵みが染み渡り、私に力を与えてくれる。

与えられた私の課題に向き合おう 打ち砕かれて成長しよう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの^{つみ あがな}罪を贖うために^{じゅうじか し}十字架で死に、

②^{はか ほうむ}墓に葬られ、

③^{みっかめ ふっかつ}三日目に復活した^{しん}こと、を信じます。

信じて歩み始めたはずの私を、^{うたが}疑い、^{まどわ}迷いが惑わします。

^{せきにん お}誰かに責任を負わせたい、^{いぞん}依存の心が^{あたま}頭をもたげます。

^{かだい}主が与えられた課題に、向き合いますから、

^{う くだ}打ち砕かれたときには、^{なぐさ}恵みと慰めで満たしてください。

さらなる力を得て、新たな一歩を^ふ踏み出すことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」